すばらしい日だ金がいる

作：広田淳一

【前提】

◎戯曲世界の設定

現代日本。

◎想定している装置

机。椅子。
柱。
スピーカ。

◎表記について

☆　――同じ数字の☆印を、同時に言う。
★　――前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる「食い気味」。
／　――台詞の調子・方向性を切り替える。あるいは後続の台詞に断ち切られる。
▲　――そでにはけながら言う。
▽　――言いながら登場する。
……　――時間的な「間」、または意味的な断絶を示す。
・　――間を取らない読点。

ト書きの「間」と「一拍」は、「一拍」の方が短い。
（このような）括弧内の文字は発音されない。
「このような」傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発音するとは限らない。

【登場人物】

大野まりか　……三姉妹の長女。
大野ゆみ　……まりかの娘。
水川一之　……ゆみの婚約者。

志田るりか　……三姉妹の次女。独身。
袴田あいか　……三姉妹の三女。
袴田俊成　……あいかの夫。

立花明　……「勉強会」を主宰する男。
児玉賢治　……「勉強会」の参加メンバー元パン屋。まりかの家主。
鈴木ちさ　……児玉の経営するパン屋の元アルバイト。
平井えみり　……「勉強会」の参加メンバー・ＯＬ。
桜井祐希　……「勉強会」の参加メンバー・会社員。
柚木春香　……「勉強会」の参加メンバー・大学４年生。
海野茉莉　……「勉強会」にバイトとして参加するフリーター。

天城洋一　……大野の元部下。立花の友人。

社員１／社員２／社員３／社員４／社員５
兎１／兎２／

【1】

◎【休職】　1

▼音響：SE　客入れ音楽にはセミの声が断続的に混じって聞こえる。

とある会社のオフィス。

朝。業務が開始されたばかりの慌ただしい雰囲気。複数の社員がいる。

女上司（大野まりか）の机の前に、一人の男（天城）が立っている。

大野　一週間？

天城　はい。

大野　（感心して）はー。一週間？

一拍。

天城　どう、ですかね？

大野　や、ごめんごめん。ちょっとあんま大胆なこと言うから脳みそどっかいっちゃって。え？　あたし三日以上の休みなんていつから取ってないんだろう……。（少し離れた社員に向かって）え、いつからだろうね？

社員1　大野さん。わかってんでしょ。

社員2　――入社以来取ったことないっす。

大野　あイター。

社員たちより「あ、俺も」「あたしもー」などの声。

社員1　このフロアの人間でそんなん取ったバカいないっすよ。

大野　コラコラお前、バカに向かってバカって、バカ。

社員1　さーせん。

社員一同、笑う。

大野　で、なに、辞めんの？

天城　あ……会社ですか？

大野　質問に質問で返すな。辞めんのかよ？

天城　や、だから会社をってことですよね？

大野　それ以外なんかあんのかよ。辞めんのね？

天城　いや、辞めません、けど……。

大野　えー？　辞めないのに一週間も休むの？　このクソ急がしい時に？

天城　はい。あの、お医者さんからも、まずは休職届を出すようにっていわれてて、あ、これ診断書なんですけど……（カバンから書類を取り出す）

大野　（興味深く受け取ろうとして）え、どれどれどれ？

大野、診断書をクシャクシャに丸めて、傍らに投げ捨てる。

大野　ドーン！

天城　ああっ……。

大野　要らねーよ。こんなもん、医者に頼んだら適当になんでも書いてくれんでしょ？

天城　（診断書を拾いながら）そんなことありませんよ。

大野　あるよ。商売でやってんだからさ、向こうも。

天城　や、わからないですけど、僕はあの、医者じゃないですし、そういう、専門家じゃないんで商売かどうかとかはわからないですけど、でも、今回だって本当は最低でも一ヶ月は休めって言われてて、

大野　一ヶ月！　一ヶ月いただきやしたー！

社員1　ありがとうございまーす！

社員一同、笑う。

社員2　ちょっと大野さん。

社員3　コンプラインアンスー。

大野　あー、ヤバい？　この発言。

社員2　ギリっす、ギリ。

社員3　やば目やば目。

大野　（天城に）そんでなに、一ヶ月？　休むわけ？

天城　や、だから一ヶ月は無理だなって思ってて、無理ですっていって……。せめて一週間のお休みっていうことにさせていただいて、それだったらだって、有給の範囲内じゃないですか？　と思って、

大野　ま、有給なんか溜まりっぱなしだけどねえ、みんな。（フロア全体を示し）みーんな！

天城　わかってます……。でも、それって企業としては本来、あんまりいいことじゃないですよね？

大野　はあ……。だったらなんでしょうか？

天城　いや、そんな、開き直られてもアレですけど……。

大野　じゃあ、なに？　みーんなで休んでのんびりのんびりやって、売上なくなって会社なんか潰れちまえばいいのにって、そういうことをおっしゃってるんでしょうか？

天城　（泣き笑いして）や、言ってないじゃないですか。

大野　みんなで失業保険もらってハローワークからやり直せとおっしゃってるんでしょうか？

天城　や、まあ……。そうなってしまったら、しょうがないんじゃないですか。

大野　ええー（笑）

天城　だって、法律通りやって収益あがらないってことは、そもそもビジネスモデルとして成立してないってことじゃないですか？　そんなのってなんか／

大野　（ゆっくり）ふざけるんじゃねえよ。

一拍。

大野　あのさ、社員それぞれに家族がいて、生活があんだよ。な？　あんたみたいな自分のことだけ考えてりゃいいっていう気楽な人間ばっかじゃないんだよ、うちは。

天城　やあ、あの、すみません、そんなあの、会社が潰れてしまってもいい、とか、そんなことは全然思ってなかったんですけど／

大野　じゃあ言うなよ！

天城　いや、僕だってそんな・会社は絶対潰れてほしくないですし、それに、今がしんどい時だっていうのはよく、わかっているつもりなんですけど、

大野　（感慨に浸って）あんたも無理してくれたしねえ……。いっぱい。

一拍。

大野　一週間ぐらい家に帰らないでやってくれたこともあったし……。ね？

天城　はい、まあ、十日、ですけど。

大野　一週間ぐらいっってんだろ、だから？

天城　はい。一週間、ぐらい。

大野　疲れちゃったよね。そりゃそうだ。そんじゃ、まあ、いいや。うん。いいよ、もう。

天城　いい……？

大野　とにかく休むわけでしょ、一週間？

天城　はい。大変申し訳無いんですがその……。

大野　★じゃいいよもう帰って。おつかれー。

一拍。

大野　やー、ごめんごめん。なんか急がしいから当たっちゃって。ま、しょうがないよね。病気なんだから。うん。あんたも病気でしょうがない。あたしも忙しくってしょうがない。もうこりゃね、しょうがないとしょうがないがゴッツンコしちゃってるから。ゴッツンコー、つって。ねえ。

天城　はい。ちょっと休んだらまた……。

大野　うん。まあ、大変だったら一週間と言わず、もっと休んでもらって大丈夫だから。オーストラリアとか行ってコアラにユーカリの葉っぱあげる仕事とかしてて。もくもく、ホーラ、

もくもく、つって。たまにゴッツンコーとかいって（頭突き）。コアラー？　ユーカリー？　オーライオーライオーライ、ゴッツンコー（頭突き）。

天城、頭突きされて困っている。

大野　なんだよ？

天城　やあ、なんでもないっす。

大野　半端な状態で復帰されても困っちゃうからさ。みんなも、あんたも。コアラたちも。

天城　いや、ですから一週間後にはきっとまた……／

大野　★突っ込めよ！　コアラについて突っ込め！　せっかくてめえのクソ面白くもない話を動物ギャグというオブラートに包んでふんわりやさしく丸呑みしてやろうっつうんだからさ、

天城　はい。す、すみません。

大野　とにかく今はゆっくり休んで、ね？　そんで、もー元気出ました、もー完璧です、立ってるだけでやる気溢れて鼻血出ちゃって、そんで溢れた鼻血でプール作って、近所の子どもが泳いでまーす、っていうぐらい休んでもらって構わないから。

天城　……はい。

大野　突っ込めよだから！

天城　はい、はい、すみません……。鼻血、は、そんなに出ませんよー。

天城、大野の肩を軽く押す。

大野　うん。そんじゃま、戦える状態になったらまたおいで。おつかれ！

天城、しばしその場で立ち尽くしている。

大野　なに？　まだなんかあんの？

天城　――戦いません。僕は。

大野　は？　なに？

天城　戦いません。もう。

大野　うん、まあ、比喩だから。別に、「うおりゃー」とかいって、キックだパンチだ言わなくてもいいんだけど、仕事をね……／

天城　僕はもう、戦いません。

大野　わかったよ、うるせーな。戦わないのね。ハイ。だからコアラにユーカリでもあげてろって。

天城　今日限りであの……退職させてください。

一拍。

大野　うん、わかった。おつかれー。

場面転換。

◎【休職】　2

社内の同フロア、別の時間。

社員1　あ、加藤さん聞きました？
社員2　なんかまた営業部から人抜けるって。
社員3　あー、あれでしょ、天城くん。
社員2　はい。天城さん。
社員3　まーた大野さん？　撃墜しすぎだろ、あの人。
社員4　ヤバいっす、今年度の撃墜率。
社員5　早くも上半期のノルマ達成って？
社員1　あれじゃねえの、もう何人辞めさせるかっていう記録に挑んでんじゃねえの？
社員2　や、でも違うんですよ、なんか、そのあと大野さんもずっとお休みになっちゃって。
社員3　は？　大野さんが？
社員2　はい。
社員4　（驚いて）なんでなんで？
社員2　や、大阪に出張行って、なんかそれっきりっていうか、
社員5　ほおお？
社員1　連絡取れなくなっちゃったみたいですね。
社員4　なになに、天城くんが道連れにした？
社員1　や、道連れとかじゃないと思うんですけど、別に。
社員5　へー？　あの殺人兵器がねえ……。
社員4　ついに本人が撃墜されちまったか……。
社員1　フフ、笑えねえ。

一同、笑う。

社員3　まあ、仕事一本槍でここまで来ちゃったわけだからなー。
社員5　疲れちゃったんすかねー。大野さんも。
社員2　ていうかあの人、恋人とかいるんですかね？　なんか想像できなくないですか？
社員4　何言ってんの、結婚してんでしょ？
社員2　マジすか？
社員1　★結婚してんすか大野さん？

社員５　いや、なんか結婚して離婚して、って聞きましたけど……。ああ、離婚？　別居か。
社員４　でも、お子さんいるんじゃなかったっけ？
社員１・２　ええ？
社員５　はい。なんか女の子がいるとかって。
社員３　へー、そうなんだ。
社員４　しかも結構大きいんだよね？
社員５　高校生とか？　確かそんぐらいの。
社員２　うーわ、超意外。
社員１　そういうの全然話さないからね、本人。
社員３　まあ、嫌いだしね、プライベートな話。
社員５　確かに。
社員３　飲み会の時とかもなんかそっち系の話題あからさまに避けてる感じだったじゃない？
社員２　ああ。
社員４　まあ、でも大野さんにはホント申し訳ないんだけどさ……。
社員１　はい。
社員４　棚ボタ。

一同、笑う。

社員１　ありがとう天城くん！
社員５　ありがとう！
▽社員３　まあ、辞めるほうも辞めるほうだけどな。
▽社員２　根性ないんすよ。
▽社員１　や、でも俺はわかるよ、そういうの。
▽社員３　お前に何がわかんだよ？（笑）
▽社員１　や、俺もたまになんか、深夜にカップラーメンとか職場で食ってっと、あれえ？ ってなりますもん。
▽社員２　わかりますー。こんなに働いてどうすんだ？　って。

◎【娘と】　その２

大野の自宅。
大野まりかがスーツケースを開き、中に荷物を詰め込んでいる。
大野の娘（ゆみ）、登場。

ゆみ　なにしてんの？
大野　ん、急に出張決まってさ。荷造り。
ゆみ　ふーん。

大野　なんか明日から二日間大阪だっていうからさ。あと、よろしくね。
ゆみ　うん。

一拍。

ゆみ　なんか、大変だね、お母さん。
大野　ねえ。助かるよ、あんたがしっかりしててくれて。
ゆみ　え、それってさ……明日の朝からってことだよね？
大野　そう。朝一の新幹線乗って。うん。

大野、スーツケースを閉じ、それを立てる。沈黙しているゆみに気づいて、

大野　なに？　どうした？
ゆみ　ダンスの発表だよ。明日。
大野　え。
ゆみ　あたしの。
大野　あー、そうだったっけ？　ごめんごめん。そうだったよね。あー、ごめんね、急に決まっちゃって。もう上の連中がなにかって言うとあたし任せだからさ、「ここは大野さんに行ってもらわないとまとまんないんでー」なんつってもう、口ばっかりでさあ。
ゆみ　――そうなんだ。
大野　ねえ。ホント困っちゃうよ。
ゆみ　ねえ。

一拍。

大野　あー、だからまた別のときあったら教えて。今度は絶対行くからさ。ね？
ゆみ　ああ……でも、いいよ別に。無理しないで。
大野　ええ？　そんなこと言わないで教えてよ。
ゆみ　休める時はちゃんと休まないと。お母さんの体のが心配だよ、あたしは。

まりか、ゆみの表情をしっかりと確かめてから、

大野　なにいっちょ前のこといっちゃって（笑）

大野、拳でゆみの肩をこづくような仕草。
ゆみ、それを真似して大野に同じことをやり返す。二人とも笑顔だが和解はない。

ゆみ　そんじゃあたしも朝早いから。

大野　うん。お休みね。

ゆみ、退場。

舞台上、大野一人が残る。

大野、やがてスーツケースの荷物をまとめ、それを立てる。

グルグルとスーツケースを引きまわしながら、足早に舞台上を歩いて回る。

同じところを、しばらくグルグルと回る。

◎【銀の斧】

夜。繁華な街路。

その中を天城が歩いている。忙しそうに仕事鞄を抱え、背をかがめるようにして道を急ぐ。

と、雷が激しく鳴って、街灯の明かりが瞬く。

▼音響：ＳＥ　雷

兎たちが登場して、天城に声を掛ける。

兎１　あなたが落としたのはこの、金の斧ですか？

兎２　それとも、この、銀の斧ですか？

一拍。

天城　疲れてんな俺……。落ちつこう落ちつこう落ちつこう……。はい、なんだっけ？　もう一回いって？

兎１　あなたが落としたのはこの、金の斧ですか？

兎２　それとも、この、銀の斧ですか？

天城　どっちも落としてないっ！

兎１　まあ。

兎２　まあ。

兎３　まあ。

兎１　なんて正直な人なんでしょう。

天城　だって落としてねえんだもん。

兎２　では！

兎３　では！

兎１　では！

天城　なんだよ、うるせーな。

兎２　あなたにこの、金の斧と、銀の斧と、鉄の斧と、ダイヤの斧と、プラチナの斧とエメラルドの斧を、ぜーんぶ差し上げます。

一拍。

天城　あれ、聞いてた？　俺は、何も落としてないの。

兎１　まあ。

兎２　★まあ。

兎１　要らないの？

兎２　ですか？

天城　うん。要らないの。です。

兎２　全部要らないの？

兎１　★ですか？

天城　うん、全部要らないの。です。

一拍。

兎１　それじゃあ何か。欲しい物をおっしゃってください。

天城　欲しい物？

兎２　はい。なんでも。

兎１　出来る限りの物は差し上げます。

兎２　★なんでも。

一拍。

天城　要らない。……欲しいものは何も無いの。です。

一拍。

兎１　それじゃ、何かあたしたちにできることを。

兎２　そう。あたしたちにできることをおっしゃってください。

兎１　★なんでも。

天城　なんでも？

兎２　はい。

兎１　なんでも。

一拍。

天城　ひとりにして欲しいの。です。

兎２　それじゃあ、あんまりです。

兎１　何もご褒美をあげられないなんて。

天城　いいんです、それで。それがあの……。

一拍。

天城　僕にとっては何よりのご褒美、なのです。

天城が雑踏に溶けていく。

場面転換。

【2】

【勉強会】

◎【待機】　その1

山中。夏。遠くから蝉の声。
勉強会の場。
海野、平井、桜井、大野がいる。大野は文庫本を読んでいる。
間。
そこへ、児玉、登場。待合室に入ってくる。

児玉　いやいやいや、（暑さが）とんでもないね、ホント。
平井　やー、暑いですよねえ、今日。
児玉　ねえ。やんなっちゃうよ……。お元気みなさん？
桜井　や、まあ。
平井　ぼちぼち。

一拍。

児玉　そんな元気だったらこんなとこ来てねえか（笑）　なに、まだ揃ってねえんだ？
平井　はい。なんか柚木さんがちょっと遅れるって……。
児玉　ああ、そう。柚木さん、……って誰だっけ？
桜井　あの若い、女子大生の。
児玉　ああ、女子大生？　なんかいたね、柚木さん。はいはい。はじめ俺、もっと小さいなに、中学生ぐらいかと思っちゃったもん。
大野　いや、中学生ってことは（無いでしょ）……。
平井　話すと案外、しっかりしてますよ。
児玉　ああ、そう。遅れるって何、またなんかあの、就活の関係で？
平井　いや、なんかいっぺん終わったみたいですよ。就活。
児玉　おお、内定でた？
平井　せやなくて、いっぺん就活続けるかどうか考え直す、言うて。
児玉　えー、じゃあどうすんの？
平井　さあ……。
児玉　んん。諦めちゃったっていうか、そういうことなんだ？
平井　そんな後ろ向きな感じやなかったですけどね。
児玉　ああ、そう？
平井　はい。

児玉　なら、良かったのかもねえ。やっぱり、大きい決断だから。
平井　（海野に）ああ、なんか就活しててな、その、柚木さん？
海野　ああ、はいはい。
平井　がんばって沢山受けたんやけど、あんまええ結果出えへんかったみたいでな。
海野　ああ……。
児玉　（海野に）はじめましてー。
海野　あ、どうも。
児玉　なに、今日あれですか、はじめて？
海野　ああ、はい。こないだ立花さんと少しお話をして。
児玉　ナンパされた？（笑）　じゃあ、もう、いろいろ話しました？
海野　まあ、はい。
児玉　どうです？　ぶっちゃけ？
海野　え？
児玉　フィーリングっていうかさ、合います？　あの人。
海野　そうっすねえ、まあ……。
児玉　ホラ、立花さんは一切クスリ使わないって方針でしょ？　言ってることもだいぶ過激っていうかまあ、けっこう極端なスタンスだからさ、
海野　ああ……。
児玉　なに？　あなたはいろいろ、他まわってから来たわけじゃないの？　ホントの初診？
海野　そう、はあ……。

一拍。

児玉　なになに？
平井　児玉さん。あんまいろいろ聞いたら……。
児玉　あー、そんな大っぴらに話すことじゃない？
平井　そうですよ。
児玉　そっかそっか。まあ、みなさん事情があってこういうとこ来てんだもんな。
桜井　別にいいんじゃないですか？　病院じゃあるまいし。
平井　似たようなとこあるやん、ここやて。
桜井　ぜんぜん違うでしょ。だって病院なんて薬出すばっかりなんだから。あんなもん薬局ですよ、薬局。
平井　それは病院によりけりやろ？
桜井　でも僕の行ってたとこはホント酷かったんですから。待ち時間ばっか長くて。いっそもうベルトコンベアー式にでもしたらいいんですよ。
平井　や、まあ、だから、あれやない？　運が悪かってんて、たまたま。
児玉　そうそう。
桜井　だから僕は悪いんですよ運が。いつもいつも。

児玉　それでも結局、こういうとこに出会えたんだから、ラッキーだったんじゃねえの？
平井　そうですよ。
桜井　いや、そう思ってますよ僕だって。だから……あれ？　違いますよ、僕は別にここが悪いとこだなんていたくなくて全然、むしろその逆で、
児玉　だよねだよね。
桜井　はい、だってここは、ちゃんとした良いところだし、良いところ、っていうかこうやって僕たちみたいな人間もオープンになんでも？　っていったってホントのなんでもじゃないですけど、ま、ある程度？　こうやって話すことができるようなとこなんですから、
児玉　うんうん。
桜井　★（海野に）あー、あなたもだから、そういう秘密主義な感じじゃなくて、いろいろ話し合えるようになった方がいいですよ。
海野　ああ、はい。
桜井　ここはそんぐらい良い場所ですから。って、そう言いたかったんですよ僕は。
大野　まあ……、個人のペースでいいんじゃないですか？　そういうのは。
桜井　そりゃもちろんです。
平井　なあ。話聞いても力になれるとも限らへんし。
児玉　かえって悪くなっちゃったりしてね。ケンカとかして（笑）
平井　そうそう。
海野　ありがとうございます。

一拍。

児玉　あー、いいのいいの。そういうね、無駄話できるところがあんま無いからね、近頃。キャバクラっていうのもなんだかね……。
平井　そんな児玉さんやないねんから。
児玉　俺も行ってないんだよ最近。いや、だからこないださ、なんか電話で愚痴聞き屋さんみたいなサービスがあるっていうから調べてみたんだけど・知ってる？　愚痴聞き屋さん？
海野　ああ、そんなのあるんですか。
児玉　高いんだこれがまた！　あんなに取られるんだったらキャバクラ行ったほうがいいよ。なんかちょっとしたそういう、スナックみたいなとこ行った方がまだ安いんだから。
海野　ああ……。
桜井　（海野に）あの、僕あの、桜井と申します。改めまして。
海野　あ、はい。海野です。
桜井　海野さん。は、なにで知ったんですか、ここのこと？
海野　ああ、いや、なんとなく、たまたまっていうか……。
桜井　たまたま？
海野　はい。
桜井　でもホラ、きっかけっていうか、なんかあったんじゃないですか？

海野　えーと、そうですね……。
桜井　誰かの紹介とかですか？
平井　ほら、桜井さんもあんま詮索せんとき。
桜井　えー？　いいじゃない、これぐらい。（海野に）ダメですか？
海野　や、ダメってことじゃないんですけど。
児玉　まだ、言葉になんないよね……。なんでこうなっちゃったのか自分でもよくわかんない、っていうかさ。――寝ても食べても休んでも、力がまったく湧いてこない。俺のやる気はいったいはどこにいっちゃったんだろう、って……。
平井　それ児玉さんの話やん。
児玉　☆あるでしょ、みんなそういうの？
平井　まあ、でも、人それぞれなんとちゃいます？
児玉　そりゃそうよ。別に、みんな同じだなんて言ってないじゃない。
平井　ま、ま、そうですけど。

桜井　☆ああ、どうなんですか？　寝れてます？
海野　ああ、はい。普通に。
桜井　あー。食欲は？　食べてます、ちゃんと？
海野　はい。食べるのは大好きなんで。
桜井　じゃ、そういう、急に痩せたとかはなく？
海野　ないっすねえ。はい。
桜井　熱もない？
海野　熱は……はい。大丈夫です。
桜井　じゃあ、安心だ。
平井　風邪とちゃうねんから。
児玉　でも言うじゃない、「うつ」は心の風邪とかってさ。
平井　心は発熱せんちゅうの。
桜井　まあ、風邪っていうよりかはなんか、骨折って感じでしたけどね、僕は。
児玉　おー、「うつは心の骨折」。その心は？
平井　「走ろう思っても走られへん」。
児玉　はは。なるほど。
桜井　ていうよりはむしろ……放っておくとヘンな形でくっついちゃいますよ、って。

と、一人の女（柚木）が登場。

柚木　こんにちは。
児玉　よぉ！　久しぶり。
柚木　お久しぶりです。
児玉　（海野に）柚木さん、柚木さん。

海野　ああ、どうもはじめまして。
柚木　あ、どうもォ。

柚木、席に座る。
長い間。

◎【待機】　その２

平井　海野さんはあの、なにしてる人なん？
海野　なにしてる人……。
平井　はい。

一拍。

平井　ああ、そんな、話したなかったらええねんけどな、ぜんぜん。なんかあんまり、お話が上手ちゃうねんなあたし。
海野　いえいえ……。
平井　せやから、児玉さんとかすごいなあ思うんですよ。いや、この人の話て、ホンマ内容無いでしょ？
児玉　★おいおーい。
平井　いや、口数多いのにあんま核心には触れてけえへんっちゅうか。あたしはなんか、いつも言わんでええことといろいろ言うてもうて。そんで、言わなあかんことは言われへんくて。なんか怒られてまうんですよ、すぐ、付き合ってくと。
海野　はあ。
平井　もう、わからへん思て。最初はええんですよ、いつも。第一印象はそんな悪いことないんですけどね、だんだん仲良うなってくと大概怒られてもうて。「ああ、こんなん言われると人は怒るんや」とか、「えっ、これ言わなあかんかったん？」とか、そういうのが鈍いっちゅうか……。で、立花さんとお話してわかったんですけどね、それって結局、全部自分のため、いうか？　自分が不利になるようなことはあたし絶対言わへんようにしてきたし、でも逆に？相手がその、不利になるいうか、そういうのに対してはぜんぜん考えてなくて、ズケズケ踏み込んでもうて、いろいろ聞き出してもうて。そんで、「あたしってもしかして聞き上手？」とか、めっちゃ呑気に考えとったんやけど、ぜんぜんそんなことなくて……。めっちゃ勝手なんですよ、あたし。口も軽いし。陰口叩くし。嘘つくし。せやから海野さんも気ィつけて下さいね。あたしもうめっちゃ、嫌なやつなんで。

一拍。

海野　わかりました。気をつけます。

平井　はい。
柚木　まあ、そんなでもないと思いますけどね……。
大野　ねえ。
平井　何の話でしたっけ？　すんません、ようけしゃべってもうて。
大野　普段の彼女がどうしてるか、って。
平井　ああ、せやった。すんません、もう、言わんでええですよそんなん。

◎【勉強会】　その１

と、そこへ一人の男（立花）、登場。

立花　はいはい。どうも遅くなりました。みなさんお揃いですかね……。
海野　はい。揃ってます。
立花　そうですか――。さあ、それじゃいよいよみなさんが待ちに待ったディスカッションの日と相成りました。ということで、じっくりたっぷり、様々やってまいりましょう。
参加者一同　よろしくお願いしまーす。
児玉　毎週やってんじゃないですか（笑）
立花　そうなんですけどね。しかし、先週やったからといって今週もやれるとは限りません。案外と……我々がこうして話し合いをできる期間は短いものですよ。
桜井　そうかもしれないですね。確かに。
立花　おおっと、会議のしょっぱなから「ネタにマジレス」失礼しました。
児玉　いえいえ。
立花　そんでもって今週から、新しいスタッフが入ります。来てますね、海野さん。
海野　あ、はい。
桜井　スタッフ？
立花　ええ。僕のまあ、いろいろと補佐をしていただくためのアシスタントと申しますか、バイトです。
児玉　ああ、そうなの？
海野　あ、そうなんです、すみませんでした。
児玉　えーっ！　やられたぁ……。
平井　★そんであんな謎めいた感じやったんや。
桜井　★や、もうめっちゃ騙されました、僕。えー。
海野　すみません、言っていいのかどうかわかんなくって……。
立花　何も隠し事なんか必要ありません。ここはそういう場所なんですから。
海野　はい。
立花　それにまあ、海野さんにも勉強会には参加していただくわけですからね。
海野　ああ、はい。そうですね。

立花　どうぞバイトだからってご遠慮なく。言いたいことがあったらバンバン言っちゃって構いませんし、一言もしゃべらなくっても結構です。

海野　ああ、うす。わっかりました。

一拍。

立花　さて、本日のテーマですが、先日、面談の際に柚木さんから出たものを取り上げてみたいと思います。ではまず、柚木さんから一言……。

柚木　あ、はい。ええっと、そんなあの、みんなで話すようなことなのかちょっとわかんないんですけど……。あの、「うつ」ってあるじゃないですか？

児玉　あるねそりゃ（笑）

柚木　これあの、治るとか治らないとかみなさんおっしゃってると思うんですけど、これってあの、治んきゃいけないものなんですかね？　そもそも。

立花　とまあ、これが、柚木さんからの問題提起です。（柚木に）どうもありがとう。

一拍。

立花　いつもお話しているように、いわゆる「うつ病」と、落ち込むー、テンション下がるー、という「うつ状態」、ま、言ってみれば「病」と「甘え」、この二つの間に明確な一線は引けません。ただ、いずれにせよ苦しんでいるんだから治したい。では、実際問題として、「うつ」が治るとはなんなのか？　いや、そもそも治る必要はあるのか？　本日はそういった議論をしてまいりましょう。

間。

桜井、挙手をして、

桜井　それじゃ、いいですかね？

立花　どうぞどうぞ。

桜井　僕はまあ、当然「うつ」は治すべきなんだろうと思います。まあ、自分は今も働きながらここに通っていますんで、結構今日のテーマはすごいとこ攻めてきたなあ、って感じなんですけど……。普通に働き続けるためにはやっぱりこの、「うつ」ってのはどうにかして治していかないと話にならないと思うんですね、社会人として。いや、人としてかなあ……。だからやっぱり、治らなくてもいいんじゃないか、とか、そういう甘ったれた考え方をすべきじゃないと思うんです。そういうふざけた人間がいると「うつ」への理解も深まらないといいますか……。

児玉　桜井さん、なにもそんな、のっけから責めなくても。

桜井　いや、責めるつもりは無いですよ、全然そんな、ええ？　責めるってことはないですよ。僕はただ、純粋に議論として……。

児玉　★もうちょっと柔らかく。
桜井　え、柔らかくなかったですか、今？　固かったですか？　固かったんですか僕は？
柚木　いや、柔らかかったですよ。
桜井　★（児玉に）ほらあ！　柔らかかったんですよ！
児玉　ごめんごめん。
平井　★（柚木に）え、なんで柚木さんは、治らんでもええっちゅう話になったん？
柚木　やっぱりあの、早く元気になってねー、みたいなこと言われるじゃないですか？　こっちとしては現状・なんとかやれてるわけだから、別にいいじゃん、みたいな気持ちもあって……。
児玉　はいはい。
柚木　私はあの……（立ち上がり）周りがやってるし、みたいのでここまで割りと生きて来ちゃったんです。……習い事もそうですし、サークルとか、就活とかもやっぱり流されてっていうか、自分はどんな仕事やりたいんだろう？　とかってまじめに考えたことなくて、「ああ、もう就活じゃん、やんなきゃ！」みたいな感じだったんで……。
児玉　忙しいからねえ、近頃の学生も。
平井　せやから逆にな、「うつ」になったお陰でこう、考えるきっかけもろたっちゅうんがあんねやんな？
柚木　ああ、そんな感じです。だから、そんなに悪いことじゃないんじゃないかなあ、って。
平井　あたしもあの、休日にこっちおるだけなんで、また昔みたいにバリバリ働けるようになっても、ええように使われてまうだけかなあ、いうんはあるんですよね。
桜井　（立ち上がり）え……じゃあ、あれですか、みなさん「うつ」は治らなくてもいいと？
平井　や、そこまで言うてへんやん。
桜井　じゃあ、「うつ」で死んでいく人間についてはどう思ってるんですか？　実際に、年間三万人からの人が自殺で死んでいく国なんですよ。交通事故なんかよりよっぽど多い。若年層に限定したら死因の一位・自殺とかってなってるわけじゃないですか？
平井　そら死なへん方がええと思うけどなあ、もちろん。
桜井　★やっぱりこれは、なんとかしてそういう人を減らしていく、そういう努力をしないといけないんですよ。だって、死んでしまったらお終いじゃないですか？　治す努力っていうのを本人もするべきだし、国とか行政とかも、みんなで一緒になって考えていくべき問題だと思うんです。だってそうじゃないですか？
児玉　まあ、そうなんだけど……。そんな固くなんないでさ。
桜井　★だから柔らかいですって！
平井　そんな緊張せえへんでええやん。
桜井　だってそりゃ、ええ？　緊張はするじゃないですか？　立花さんもいるわけですし。
平井　ええ？　そう？
桜井　しますよ、そりゃ。
児玉　（柚木に）する？　緊張？
柚木　いや、私はそんなに。

児玉　ねえ。俺も全然……。

桜井　あー、いや、違いますよ。立花さんを信用してないとか、そういうことじゃなくって、いや、僕はむしろかなり信用している方だと思うんですけどね、みなさんの中でも特に！　……ああ、いや、これは別にみなさんが立花さんを信用してないとかそういうことを言いたいわけじゃ全くなくて……。

平井　うんうんうん。

桜井　そういう、みなさんの信用を疑っているということではないんです。そうではなく、あくまで僕個人の問題として立花さんを信用していると。だからこそ、とても緊張してしまう、と。

平井　わかったわかった。

柚木　優しすぎるから、桜井さんは。

桜井　★いやいやいや、そういう優しさの問題とかじゃなくってね、あくまで僕はそういう誤解を与えてしまうのが嫌なんですよ。だってそういう誤解っていうのは放っておくと、ねえ？　人間関係に大変な問題を引き起こしたりするもんですから、

児玉　いいから一回座んなよ（笑）

立花　そうですね、落ち着きましょう。

桜井、座る。

一拍。

児玉　こういうとこが根っこなんだろうな、桜井くんは。

平井　うん。

桜井　★何がですか？

児玉　え、なになにするべき、っていう考え方？　それが「うつ」の原因のひとつなんじゃない？

平井　「べき思考」やな。

桜井　ある程度の常識がなかったら社会人としてやっていけませんよ。

児玉　確かにね。そりゃ、「どうでもいい」と思っている人よりは、「しっかりやるべき」って考えている人の方が有能かもしれない。

桜井　そうですよ。

児玉　でも、そこが落とし穴ってやつでさ。そういう厳しさが逆に作用してくることもあるわけじゃない？　自分に対しても他人に対しても攻撃的になっちゃうていうかさ、

桜井　なってないですよ、攻撃的になんて。

児玉　いやでも、厳しくはなっちゃうでしょ？　遅刻すべきじゃないのに遅刻した自分はダメだ、とかね。ちゃんとできていないからあいつはダメだ、とかさ。

海野　やー。あたしめっちゃそれです。すっごいあるかも……。

児玉　あ、海野さんもじゃあ危ないよ。うつのエリート、うつリートだ。

海野　うつリート？　え、そんな言葉があるんですか？

児玉　ないよ。今作った。

お道化たポーズをとる児玉。物言いたげな海野。

平井　あ、こういう人やから。

海野　はい……。

柚木　確かにあたしも、……はっきりしないことに弱いんですよね。勉強にしても、恋愛にしても、この先どうなるの？　って考えるといろいろ不安になっちゃうっていうか……。

児玉　何事もはっきりさせたくなっちゃう？

柚木　はい。まあ、だからって「こうすべき」って考える必要はないんでしょうけど……。

児玉　でも考えちゃうよねー。

柚木　はい。

桜井　それは当たり前ですよ。だって、「べき」って考えてる部分がないと自分の美学っていうか、そういうのが一切なくなっちゃうわけじゃないですか？　こういう風に仕事を仕上げたい、っていう意欲とか、やる気とか、何にもなかったら話になりませんよ。

立花　★その美学が……自分を痛めつけてしまう場合もあるんじゃないか？　という話ですね。

桜井　んん……。

間。

児玉　結局、自分が苦しくなっちゃうかどうかじゃねえの？　楽しめてるかどうか？

桜井　でも、楽しめないからもうやめよう、とか、そんなヌルいこと言ってたら、自称・「うつ」みたいな人がどんどん増えてっちゃいません？

児玉　だから、それの何が悪いの、って？

桜井　そりゃ悪いじゃないですか？　そんなんじゃだって、社会が回らなくなっちゃいますよ。

児玉　でもさ、「社会が回る」ってことを最優先で考えるからおかしくなっちゃうんじゃない？

桜井　ええ？

児玉　そりゃ効率よく回ったほうがいいよ、何だって。だけどそういう、効率のためにどんどん人間がすり減っていっちゃって……それでいいのかよ、って。効率で言ったらロボットに勝てねえんだから人間は。

桜井　んー、まあ確かにそうですけど……。

平井　言い方の問題もあると思うんやけどな。同じバドミントンやっとっても、勝った時に「やったあ、楽しかった」言う人と、「恩返しができてホッとしている」言う人とおるわけやん？　どっちがええとかやないねんけど、絶対「うつ」になりやすいんは、ホッとしている、とか言うた人やん？

海野　あー。
桜井　むしろその人の方が僕は共感できるんだけど……。
児玉　★そいつがバドミントンを楽しめているのかっていうね。
平井　そうそう。
児玉　★やっぱそこが問題だよな。
海野　でも、あの……。

一拍。海野は立花のことを気にしつつ、

海野　楽しんじゃったら終わり、っていうのもあるんじゃないですかね？
平井　え、え、どういうこと？
児玉　いいね新人。どんどん言っていこう。
海野　だって小さいなんか、市のバトミントンの大会とかで優勝して、ああ、楽しかった、とか思ってたら終わるっていうか。もっともっと強くなりたい、って思わないと勝てなくないですか？
児玉　そうだね。
平井　まあ、それはあるよな、実際。
柚木　え、でも、満足しないっていうことになると、いつまでも勝負が続いちゃうわけですよね？　いつまでも、いつまでも？
海野　そうっすねえ。
柚木　それって、いつかは負けちゃいますよね？　全員世界一になれるわけじゃないんですから……。そしたらそこで壁にぶつかってしまって、どうして楽しくもないのにバトミントンやってるんだろう、って、なっちゃいません？
平井　どうでもええねんけど、「バトミントン」やなくて、「バドミントン」な。
柚木　あっ、そうでしたっけ？
平井　ごめんな、やってた人間からするとスルーできひんくて（笑）
柚木　すみません。え、でも海野さんも「バトミントン」って言ってませんでした？
海野　あ、はい。「バトミントン」だと思ってました。あれ、違うんすか？
平井　バド、です。
海野　えー、そうだったんだ。
柚木　（立花に）なんでかあたしの時だけ突っ込まれるんですよ……。
立花　うんうん。
平井　★いやいや、深い意味ないから。ごめんな。
桜井　（海野に）昔、選手だったんですよ、平井さん。
海野　あ、そうなんすか？　すごいっすね。
平井　やめてやめて、選手としてはもう、カスみたいなもんやから。
立花　（全体に）続けましょう。

柚木　はい。あー、ちょっと思ったんですけど、その「べき思考」っていうんですか？　そういうのを他人に対してどこまで言っていいのか、っていうのも結構、難しいですよね。
桜井　ん？　どういう意味ですか？
柚木　だからなんか、怒らなきゃいけない時とかってあるじゃないですか？　叱るっていうか、そういうのをしなきゃいけない時。
桜井　はいはい。
柚木　あたし、そういうの苦手で。なんか、どうでもいいと思っちゃうんですよね……。まあ、明らかにダメな人だったらいいんですけど、ああ、犯罪とかしちゃう人だったら怒るのも簡単じゃないですか？　痴漢とか、万引きとか。
平井　なにしとんねんコラ、いうて（笑）
柚木　はい（笑）　でも微妙な人っているじゃないですか？　毎日3分だけ遅刻してくる人とか？
児玉　んー、微妙だね。
柚木　あ、あと、ちょいちょい先輩にタメ口を利く人とか？　そういうのどうしたらいいのかな、って。
海野　わ、あたしそれなんですけど……。
児玉　え、タメ口はよくない？　別に。
柚木　いや、いいんですけどね。基本どうでもいいんで。
児玉　はいはい。
柚木　でも、こっちだってなんか、「タメ口聞いてんじゃねえ！」とかって怒りたくないじゃないですか？　やっぱ、どっかでは誰かが怒んなきゃいけないと思いますんで……。
平井　ええんちゃうの、放っといたら？
桜井　そうもいかないでしょ。
柚木　はい。放っておくっていうのは……。
平井　疲れてまうやんこっちも。
柚木　そうなんですよね。そういうので結構、ストレスっていうか。どうしようどうしよう、っていつも悩んじゃって……。
海野　（明るく）すみませーん。
柚木　いや、全然！　いいんですけどね、ここでは。ここではあの、いいんですよ？
立花　大野さんはいかがです？　他人にどこまで「べき思考」を求めて良いものか、という議論ですが。
大野　どう、でしょうね（笑）
立花　今日はあんまり、発言がないみたいですけど。
大野　ああ、いや、みなさんのお話を聞かせていただいて……。あ、じゃあ……。
立花　なんでしょう？
大野　ちょっとあの……お茶にしませんか？　▼のど乾いちゃって、あたし。
平井　あ、そう来ましたか。
児玉　ま・でも、確かに。

桜井　風が入って来るっていってもなんせ、エアコンがないですからね……。
海野　そうっすねえ。
立花　では、暫時休憩ということにいたしましょうか。向こうに冷えた麦茶ありますんで……。

場面転換。

◎【診察室】　その1

数時間後。
立花が診察室にいる。そこへ、海野に案内された大野が入ってくる。

海野　（大野に）それじゃ、どうぞ。……立花さん。
立花　ああ、あれ？　大野さん今日って、個人面談の予定入っていましたっけ？
大野　ああ、いえ。そうじゃないんですけど、あの、ご迷惑でしたか？
立花　いやいやいや、大丈夫ですよ。どうかなさいましたか？
大野　ええ、ちょっとあの……。これなんですけど……。

大野、一通の手紙を立花に手渡す。

立花　なんですか？　（実際に見て）ああ、招待状？　結婚式の？
大野　はい。それであの、どう返事をしたらいいか……。
立花　ふーん。ご友人か何か？
大野　ご友人、というのもちょっと違うんですけど……。
立花　ああ、そんなに仲が良くない方？
大野　まあ、はい。うまくは行ってません。
立花　んー、じゃあ、断ってもいいんじゃないですかね？　というか、行きたいんですか？
大野　もうあの、軽く断りの連絡は入れたんですけどね……。できれば、行ったほうがいいんだろうな、と思っているんです。
立花　ああ、そうですか？
大野　だってまあ、招待されているわけですし。
立花　まあねえ……。でも、向こうだって招待した人全員が来るとは思ってないと思いますよ。（海野に）ねえ？
海野　うんうん。っすねえ。
大野　（ホッとして）そうですか？
立花　ええ。あなたが欠席したって結婚式はぶち壊しになんかなりません。
大野　ああ、ですよね。そうかあ。そうですよね？
海野　ハイ。もう。

立花　いいですか、大野さん。――大野さんは今、体調を崩されているんです。なんでも元気だったころと同じようにこなす義務はないんですよ。ホラ、誰だって熱が出たら休むのが仕事でしょう？

大野　でも、熱を出すのは自己管理が甘いからじゃないですか？

立花　（笑）いくら自己管理をしていたって、最終的には人間はいつかガタが来て死にます。何事も完璧はないんです。

大野　そっかあ……。私も今、ガタが来ているわけですからね。

立花　いや、そこを強調しないでもいいんですが……。また、自分の責任を重く考えすぎてるんじゃないですか？　ホラ、こないだ言った「個人化」ってやつですよ。

海野　「コジンカ」？

立花　ええ。雨が降るのは低気圧の作用であって、大野さんが雨女だからじゃないし、お母さんが亡くなったのは寿命ってやつで、大野さんがまじめに看病していなかったからじゃない。

大野　はい。

立花　あなたが結婚式に参加しなくたってきっといい結婚式になりますよ。まあ、ならなくっても、大野さんのせいじゃありません（笑）

大野　そうですよね？　ああ、よかった。ホッとしました、なんかあたし。

立花　そんな親族じゃあるまいし、どうしても出なきゃいけないってことはないんですよ。

海野　ですね。

大野　ああ……。

一拍。

大野　親族はどうしても出たほうがいいんでしょうか？

立花　まあ、親族だったらそりゃ……あれ、ご親族なんですか？

大野　はい。娘です。

立花　［あ、

海野　［娘？

立花　あ、娘さんご結婚なさるんですか？　あれ、え？

大野　はい。そうみたいなんです。

立花　ああ、もうそんなお歳なんですか。

大野　まだ二十一なんですけど……。

立花　そりゃ、お若いですね。でも、そう、あー。そうですか。

大野　絶対離婚しますよ。まだ自分も子どもみたいな歳で何を考えているんだか……。

立花　そう感情的に決めつけちゃいけません。二十一で結婚した人がみんな離婚するわけじゃないですし、

大野　それはそうですけど、

海野　ああ、もしかして……（妊娠を示唆するジェスチャー）？

大野　いや、そうじゃないみたいです。

立花　じゃ、いいじゃないですか。や、まあ、別に妊娠してたって悪いことはないんですが……。

大野　あたしだって娘の決めたことなんだから、それでいいと思ってるんです。

立花　ええ。

大野　でも祝福はできません。そんな権利が、自分にあるとは思えないんです。

間。

大野　やっぱり出たほうがいいんでしょうか？

立花　一般的には、そうでしょうね。娘さんだって待っていると思いますし。

大野　いや、そんなことはありません。むしろあの、来ないで欲しいんだと思います。

立花　でも、招待状が来てるんでしょう？

大野　それは、水川さんが送ってくださったんです／ああ、その、お相手の方が水川さんていうんですけどね、とても私に気を遣ってくださる方で……。

立花　いい事じゃないですか。ああ、もうお会いになったんですか？

大野　いや、何度かお電話でだけ……。でもホラ、そこにメモがあるじゃないですか？　ここですここ、出席欄のところ。これゆみが書いたと思うんですけどね……。

立花　ああ……「無理しないでね」。

大野　ね？　来てほしくないんですよ。「無理しないでね」、「来なくていいよ」そういう意味なんですよ。

立花　いやいや、これは大野さんの体調のこともあるし、気を遣っているだけなんじゃないですか？

大野　いいえ、そういう子じゃないんです。本当のことは言わないんです。いつもいつも。小さい時からずっとそうでした。これっぽかしも信用してないんですよ、あたしのこと。まあ、そう思われても仕方がないような母親でしたからね。あたしが全部悪いんですよ、結局。壊れてしまっているんです。人間としての信頼関係が徹底的に壊れてしまっているんです。

立花　そんなことといったって親子なわけですから（笑）

大野　いえ、親子っていってもあれなんです、夫の連れ子といいますか……。

立花　ああ、そうなんですか。

大野　はい。

間。

立花　ちょっと歩きましょうか？　▼ああ、大野さんのお宅まで歩きながら、ゆっくり考えてみましょうよ。

大野　歩くんですか？　車じゃなくって？

立花　歩けない距離じゃないでしょう？　海野さん、ちょっと出てきますんで、あと、戸締まりだけ……。

海野　あ、はい。

立花　（大野に）じゃ行きましょう。

立花、席を立ち、歩き出す。大野、それについていく。

▽**大野**　……あの、お帰りが大変じゃないですか？

▽**立花**　いやあ、たまには汗かきませんと。人間、ロクな考えが浮かびませんから。

▽**大野**　雨でも降ってきたらまた大変じゃないですか？

▽**立花**　その時はじゃあ、傘を貸してください。

▽**大野**　ええ、もちろんもちろん。

場面転換。

【3】

【山小屋】

地方の山深い民家。木造住宅。

◎【山小屋】　1　到着

ルリカ、袴田、あいか、が順に登場。

ルリカ　（小屋の様子に驚いて）なになになに、なんなのこれ？
袴田　いやー、いいっすねえ。なんか……いかにも、っていう感じで。
あいか　うん……いい、かねえ……。
ルリカ　なに「いかにも」って？
袴田　え？　いかにも山小屋だなあ、っていう。
ルリカ　……そりゃあ、そうでしょ。
あいか　（ルリカに）え？　ホントにここで合ってんの？
ルリカ　さあ？　合ってんじゃないの？
袴田　（ルリカに）住所としてはここで合ってますけどね……。
ルリカ　ああ、そう。
あいか　（奥へ向かって）すみませーん。すみませーん？

一拍。

袴田　誰もいないのかね？
あいか　ね。誰か住んでそうな感じなのにね。うわうわうわ、虫、虫。
ルリカ　え、どこどこ？
あいか　それそれ。
ルリカ　わああ、おおおお。
袴田　おお、でっけえ。
ルリカ　なにそれ？　カミキリ虫？
袴田　カマドウマじゃないですかね。
あいか　ちょっとそれどっかやっといてよ。
袴田　わかったわかった。

袴田、虫を指で摘んで外へ運び出す。

ルリカ　……脚、長！

あいか　すんごいとこ住んでんだねえ、お姉ちゃんも。
ルリカ　酷いとこ……。

一拍。

ルリカ　だからさ、ちょっと強引にでもしっかりさせないと。本人がなんていっても。
あいか　まあ……その方がいいのかもね。
ルリカ　そんな曖昧な言い方しないでよ。なに？　まだはっきりしないの、あんた？
あいか　じゃないけど……。マー姉ちゃんにはマー姉ちゃんの考えがあるわけじゃん？
ルリカ　だから病気なんだって。
あいか　うん。まあ、そうなんだけど……。
ルリカ　★病気の人の病気の考え聞いてどうすんの？　本人の為にもなんないし、ゆみちゃんだって絶対、こういうのは一生残っちゃうわけだからさ。
あいか　でも、どうしても来て欲しいって言ってるわけじゃないんでしょ？
ルリカ　そりゃゆみちゃんだって言えることと言えないこととあんでしょうよ。でも、今は感情的にこじれちゃってんだから仕方ないでしょう？
あいか　まあねえ……。
ルリカ　ここ何年かはお姉ちゃん、ちょっと病気なんだからさ。それで判断力も失っちゃってるていうか？　今はだから、そういう状態なんだよ。
あいか　わかってるって。だからちゃんと、ね。連れて帰ろうよ。
ルリカ　うちらの問題でもあるんだから。一生後悔するよ、ちゃんとしとかないと。
あいか　そうだね……。

ルリカ、あいか、部屋の中で一息つく。
袴田が虫を捨てて部屋に戻ってくる。半分だけ部屋に顔を出し、

袴田　ちょっと俺、（タバコ）一服してていい？
あいか　ああ、うん。ごめんねなんか、ずっと（車で）我慢してもらっちゃって。
袴田　いいのいいの。やっぱ、こういう自然の中で吸うとまた、ね……。
あいか　じゃ、ごゆっくり。
袴田　あーい。

間。

ルリカ　（皮肉を込めて）「優しい」からね、ホントあいかは。
あいか　なにが？
ルリカ　いや別に何がってわけじゃないけど、……「優しい」なって思って。
あいか　いや、え？　なんか引っかかるいい方じゃん？

ルリカ　なんでもないって。
あいか　や、ルーちゃんが言うからこんなところまで来てんだからね？　そんなこと言われたらなんか、（不満気に）えー、って感じなんですけど。
ルリカ　別に何も言ってないじゃん？　「優しいね」って悪いことじゃないでしょ別に。
あいか　悪い意味で言ってんでしょ、だって？
ルリカ　じゃあ、忘れて今の。ごめんごめん。全然何も思ってないから、あいかのことは。なんにも、なんにも思ってない。
あいか　なにそれ……。

◎【山小屋】　2　家主

児玉賢治、鈴木ちさ、そして袴田、登場。

児玉　ああ、こりゃどうも……。
チサ　こんにちはー。
ルリカ　ああ、あの、えーと、
児玉　大野さんの？
ルリカ　ああ、はい。
あいか　そうです。大野、の、
児玉　妹さんたちね。伺ってますよ。
ルリカ　ああ、そうですか？　え？　私たち来るっていってました？
チサ　ええ、なんとなくそんなことを……。
ルリカ　へー。
児玉　「あいつらマジで来やがるかもしれない」みたいな感じでしたけど。
袴田　ははは。

姉妹は笑わない。一拍。

児玉　あー、泊まっていきます、今日。みなさん？
あいか　や、それはちょっとまだ……。
児玉　あー、わかんない？
あいか　はい。お姉ちゃんと話してみないことにはなんとも……。
児玉　そりゃそっか。だよねー。
ルリカ　いや、帰ろうと思ってます。できれば姉も一緒に。
児玉　あ、そう。
チサ　せっかくいらしたのに……（児玉に）ねえ。
児玉　うん。
あいか　★あの、お二人は（どちら様で）……？

児玉　ああ、すみません、そうですよね。俺はあの、ここの家主、で……児玉です。
あいか　ああ、どうも。
ルリカ　児玉さん。
児玉　ここはあの、前に住んでた人がもう、山降りるっていうんで譲ってもらって。そんでいくつか部屋余ってたから、そんじゃあ、ってことで大野さんに間借りしてもらってて……。
あいか　ああ、そういう……。なんか、お世話になっちゃってるみたいで。
児玉　いやいや、お世話なんてことは……。無駄に余っててもしょうがないからね、助かってるぐらいで／ああ、どうします？　あの、ご飯ぐらい食べてきます？
袴田　ああ、ねえ。
あいか　どっか食べるとこあればいいんですけど……。
児玉　何もないですよ。
袴田　あ、ない？
児玉　ないない。一応、しばらくいったら蕎麦屋さんがあんだけど、……いつやってるかわかんねえ店だから（笑）
袴田　☆じゃあダメですね（笑）
児玉　うん。だからうちで食べてきなよ。いいよ。たまにはにぎやかな方がいいし。
あいか　☆（大野に）どうする？
ルリカ　あたしまだおにぎり一個あるから。
あいか　ああ、そう。
チサ　（児玉に）じゃあ、なんか買い出し行ってきちゃいます？
児玉　そうしよっか。
チサ　いったんゆっくりしちゃうとまた降りるの大変になっちゃうから。
児玉　そうだね。そうするか。

◎【山小屋】　3　合流

と、そこへ大野まりか、立花明、登場。

大野　あ……。

皆、不意の対面に言葉を失う。

袴田　ああ、どうも。
大野　ああ、こちらこそ。えーと、あの……ねえ。
袴田　はい。ご無沙汰しております。
大野　わざわざすみませんね、こんな所まで。（立花に）これあの、妹なんです、

立花　ああー。
大野　ルリカと、あいか、と、その旦那さんの……。
袴田　あ、袴田、俊成です。
立花　ああ、こりゃどうも立花です。

立花、握手して回る。ちょっとヘンな型の握手である。

大野　なに、俊成さんが運転してきてくださったの？
袴田　はい。お姉さんと相談して。
大野　すみませんね。こんなところまで。
袴田　いえいえ。
児玉　みなさん、何か飲まれます？
チサ　ああ、ほうじ茶かコーヒーかありますけど？
あいか　それじゃほうじ茶を。

一同、口々に飲みものを注文する。

児玉　☆じゃあ、俺やっとくからお前買い出しいってきちゃえよ。
チサ　ああ、そうですか？
児玉　うん。夕飯ちゃんと作らないといけないし。
チサ　ああ、ですね。じゃあ、あたしは。
児玉　はーい。

チサ、退場。

袴田　すみません、
児玉　いやいや。

※ここは同時多発会話。

大野　☆びっくりしちゃったでしょ、あいか？
あいか　ん？　何が？
大野　すんごい山奥で。
あいか　まあね。でもルーちゃんに聞いてたし。
大野　虫でっかいから気をつけな。ネズミもでるし。
ルリカ　（驚いて）ネズミぃ？
大野　最悪、熊出るから。さっさと帰ったほうがいいと思うよ。
ルリカ　うわうわうわ。

あいか　ヤバいんだけど、それ。
大野　俊成さんは大丈夫なの、そういうあの、ネズミとか？
袴田　無理ですね。ゴキブリとかも全然無理なんで。
大野　ああ、そう。
ルリカ　でもさっき、カマドウマ……。
袴田　あれ一人だったら、余裕で逃げてます。
ルリカ　ああ……。
大野　ゴキブリは出ないから安心してよ。
袴田　あ、出ないんですか？
大野　なんか、クモが食べちゃうんだって。
袴田　あ、へー、クモが、ゴキブリを……。

みな、それぞれ腰を落ち着ける。
間。

ルリカ　三年ぐらいかね。
大野　ん？
ルリカ　お姉ちゃんこっち来てから。
大野　かなあ。うん。
ルリカ　あの頃一回来たから会うのもそれ以来か。まだあん時はもうちょっと町に近いとこだったけど。
あいか　いや、お母さんのお葬式の時に会ってるかな、うちらは。
大野　だね。
あいか　うん。
ルリカ　ああ、そっか。そうだよね。

一拍。

立花　あの、お邪魔、でしたかね？
ルリカ　いやいや、そんなことは全然。
大野　大丈夫ですよ、そんな。ねえ？
あいか　はい、全然。
大野　言っとくけど、もう話すこと何も無いよ。あたしは。
ルリカ　あたしがあるんだよ。
大野　うん。だろうけど、あたしは無い。帰らないし、結婚式にも出ません。
ルリカ　ダメだって。そんなんじゃ何も解決しないよ。
大野　なんでもかんでも解決すりゃいいってもんじゃないでしょ？　すぐには解決できないことだってあんのよ。

ルリカ　またそうやって……。
大野　じゃあ何？　あんたみたいにズカズカ他人の生活に踏み込んでって、なんでもかんでも好き放題言い散らかして、それが解決なの？
ルリカ　そうやってすぐ言葉尻取らないでさあ、
大野　あたしが結婚式には出たくないって言ってて、ゆみもそれでいいって言ってるんだから、それでおしまいでしょ？　（あいかに）あいかならわかるでしょ？
あいか　いや、まあ、そうも思うんだけどさ。
大野　でしょ？
あいか　やっぱ一生残るものだからさ、出るだけ出てあげたっていいんじゃないかなあって思うけど。
大野　イヤです。
あいか　どうして？
大野　そんなのあんた達の知ったこっちゃないでしょ。
あいか　それだけ聞かせてよ。ちゃんと納得できる理由があったらルーちゃんだって納得してくれると思うし。
大野　ああ、わかった。なるほどね……。要するにあんたはルリカがうるせえからそれに付き添って来ただけなのね？　ご苦労さまでした、こんなクソ山奥まで！

大野、姉妹と距離を取り直して、

大野　……感謝はしてんのよ、そりゃこっちだって。こうやって憎まれ口ばっかり叩いてるけどそりゃあね、わざわざこんな所まであんたたちが来てくれて、こうやってお節介を言ってくれるのはありがたいよ。ありがたいけどさ、それは私の課題なの。あんた達の課題じゃない。
あいか　課題……？
ルリカ　荷物だけまとめてくれればさ、あとは別に、お姉ちゃんが式でやんなきゃいけない仕事とかはなるべく減らしてあげるから。
大野　そういう問題じゃないの。なんでそうやってあたしの課題をスルーして……／別にやろうと思ったらあたしだってなんだってできます。わかってんのそんなことは。
ルリカ　じゃあ、そうすればいいじゃん？
大野　行かない方がいいんだよ、あたしみたいのは。
ルリカ　★そんなことないって。
大野　★あんのよ！　少なくともあんたが決めることじゃない。
ルリカ　そりゃゆみちゃんだって今はいろんな感情があっていろいろ言っちゃってるけどさ、絶対お姉ちゃん来てくれたら喜ぶと思うし、というかさ、自分の結婚式にお母さん来てくれなかったら悲しいでしょ？
大野　そうとは限んないでしょ。
ルリカ　悲しいじゃん。絶対残っちゃうから、そういうのは。ずーっと残っちゃうよ、一生のことなんだから。

大野　あんた結婚もしてないくせによくわかるねー、そんなこと。

ルリカ　そりゃ……ええ？　それは今、関係ないじゃん。

大野　関係はないよ。感心したってだけ。よくわかるなー、実体験もないのにー、と思って。

ルリカ　わからないよ、そりゃあたしは。結婚してないからね。わかんないよ。だけど、お姉ちゃんならわかるでしょ？　そういう時に来てくれなかったらどういう気持になるかって想像がつくでしょ？

大野　なんでもいいから来て欲しい、とも思ってなかったよ。それはお互いに、来て欲しいな、行きたいな、ってそういう気持ちがあってはじめてそういうことになるわけでしょ？

ルリカ　（急に明るく）いいじゃん別に。くだらないって。何にこだわってるんだか知らないけどさ、別にお姉ちゃんだって、前みたいに仕事で忙しいわけじゃないんだから行ってあげればいいじゃん。

大野　だからそれは、あたしとゆみの間の課題なんだって。

ルリカ　なんなの課題って？　イヤなんだよそういうのは。そういうところでわだかまりがずっと残っちゃって、残念じゃないすっごく？

大野　あんたがお母さんのお葬式に出られなかったことみたいに？

間。

ルリカ　それこそ今は関係ないでしょ？

大野　あるでしょ。あんたはあん時に帰ってこれなかったことが、なあんかずっと引っかかっちゃってて、それでそういうことを言ってるんでしょう？　（語調を変えて）あのさあ、自分の後悔を他人に押し付けないでくれる？　自分の教訓は自分の人生で活かしていってください。私はね、ちゃんとお母さんのお葬式には出たよ。ちゃんと出て、見送ってあげた。あんたと違って。

あいか　（まりかに）★お姉ちゃん。

大野　だってそうでしょ？　あんただって、あの時はすごい怒ってたじゃない？　でも、言わないのよ。本人の前ではあいかは絶対言わない。いい性格だよ。……（二人に向けて）どうかしてんのよ、あんたたち。あたしはね、そんな親の葬式も出ないような常識のカケラもない人間にこっちの生き方をとやかく言われたくないっていってんの。

あいか　（お葬式に）出たよ、あたしは。

大野　そうだよ。（ルリカに）だからあたしだって、あいかだってあん時はすごいいろいろなことを思ったよ。だけど黙っててあげたでしょ？　あんたの生き方をとやかく言わないでつきあってあげたの。それを、こういう時ばっか偉そうな顔しないでよ。自分は結婚もしない、子どもも作らないっていって自由に自由に生きてきたんじゃない？　捨てたんでしょ？　あんたはそういう、偉そうな顔をする権利を自分の自由な生活と引き換えに捨てたの！

一拍。

ルリカ　それでも、出てあげてほしいんだよ。

大野　放っといてよ。知らないよ。

ルリカ　いいきっかけなんだよこれは、お姉ちゃんにとっても。

大野　何が？　あたしにとって？

ルリカ　こういうところに居て、なんだかよくわかんない人たちと付き合ってくんじゃなくてさ、お姉ちゃんがもともと作ってた家族とか、そういう大切な人たちともう一回絆を取り戻すチャンスじゃない？

大野　絆って(笑)

ルリカ　私はね、尊敬してたんだよお姉ちゃんのこと。あたしもお姉ちゃんもずーっと仕事ばっかりでさ、だけど、お姉ちゃんはちゃんと結婚して所帯をもって……。私はそういうのは全部諦めちゃって、捨ててきちゃったからね。私にはわからないことがいっぱいある。でも、お姉ちゃんはそういうの全部ちゃんとやって、本当すごいなって尊敬してた。すごいなあ、って。でも、今のお姉ちゃんは尊敬できないよ。

大野　結構です、尊敬なんかしてもらわなくって。ちっとも望んでない。

ルリカ　それでもさ、お姉ちゃんが仕事も辞めちゃって、家族とも離れ離れみたいになっちゃって、そうやってなんか、自分のやってきたことを否定するみたいにしてこんなところに来て、いろいろ関係切っちゃって。それはなんか……んー、わかるけどさ。

大野　はあ？

ルリカ　いや、わかんないけどさ、お姉ちゃんにもいろいろと考えがあったんだろうし、事情があったんだろうし、苦しかったんだろうし、悲しかったんだろうし……。でも、そのままじゃダメなんだよ。ゆみちゃんはだって、お姉ちゃんの子どもでしょ？　そりゃ仕事はいくらだって代わりがいるよ。いくら一生懸命になってやってたって代わりはいる。でもさ、ゆみちゃんにとってお母さんの代わりはいないんだよ。お姉ちゃんしかいないの。わかるじゃん。わかるでしょ？

大野、笑う。

大野　あんたってホントすごいよねー。思い込みでそこまで他人に同情できるのってすごい。才能だよ。きっとあんたが家庭を持ったらすっごい・いい家庭になるんだろうなー。って思うよ、本当に。

ルリカ　もうやめてよ。傷つくよあたしだって。

大野　ははは。傷つけば？　知らないよ。傷つくとか傷つかないとかそんなアホみたいにナイーヴな神経してるならわざわざこんなとこ来てまで他人の人生に首突っ込むような真似すんじゃないよ。

ルリカ　他人じゃないよ。お姉ちゃんだよ。

間。

ルリカ　私にとっては、たった一人しかいないお姉ちゃんだよ。
大野　はい、そうですね。知ってまーす。

一拍。

大野　はは。あんたの未来の旦那さんにお姉ちゃんがいたら、もう一人二人増えるかもね。弟はもう実際に一人増えたわけだし、（袴田に）ねえ？
袴田　え？　ああ。
あいか　そういうことじゃないじゃん、今言ってるのは／
大野　★とにかく、あたしはここを降りるつもりもないし、結婚式にも出ないから。
ルリカ　私は絶対にお姉ちゃんを連れて帰るから。
大野　暴力なんですけど（笑）　やめてくれる？　なんであたしがどうすんのかをあんたが決めるわけ？　バッカじゃなかろうか本当に。あ、なに？　それで俊成さん連れてきたの？　最終的には暴力であたしをここから下ろすために？　（袴田に）そういうことなんですか？
袴田　や、しませんよ、僕はそんな。
大野　★ですよね。そんな非常識なこと。
袴田　ええ、そんな話はぜんぜんお姉さんともしてないですし。
大野　★だってさ！　残念だったね。

一拍。

あいか　まあ、一応、言っとくとさ、ゆみちゃんと旦那さん？　その、水川さんも明日にはいらっしゃるってよ。
大野　ここに？　なんで？
あいか　いや、まあ、いろいろと話して……／
大野　★やめてよ！　なんでそういう……くだらない。今すぐ断ってよ。あたしは全然、会ったって話すことなんて何もないし、ゆみだって不愉快なだけなんだから。わかるでしょ？　あの子の期待してたようなお母さんじゃないの、あたしは。いつもいつも期待はずれなだけなの、会ったって。
あいか　なら自分でそう言えば。

一拍。

立花　ちょっと……よろしいですかね？　いや、まったく僕のような部外者が立ち入る話ではないというのはよくわかっているんですが……。
大野　いいんですよ、立花さん、すみませんなんか。
立花　いえいえ、ここで関わらないのなら、あなたと関わっている意味がない。（ルリカ・あいかに）よろしいでしょうか、ちょっと発言をさせていただいて？

あいか　まあ、どうぞ。

立花　ありがとうございます。ああと、まずは自己紹介が必要になるかとは思うんですが、……立花明と申します。僕はあの大野さん、――というと、ここではややこしいんですかね。まりかさん、――というと、ちょっといやらしいんですかね。でもまあ、まりかさん。まりかさん。まりかさん、の友人、相談相手といいますか……。ああ、現在、まりかさんが、いろいろと生き方全般を話し合っている勉強会があるんですがね、その勉強会を主宰している者です。

ルリカ　勉強会……。

あいか　（小声）なに、宗教？

立花　おおっと、いきなり強烈な先制パーンチ。宗教ではありません。断じて。まあ、うちの勉強会は言ってみれば人生道場のような場所でして、――現代の精神医療ではなかなか救い切れなかった方々がうちに集まってきていろいろと話し合いをする、そんなところです。

ルリカ　はあ……。

あいか　（立花に）自己啓発セミナーみたいなことですか？

立花　はいー。ここで鮮やかなワンツーパーンチ。いいえ、自己啓発セミナーでもありません。断じて。

あいか　そうですか。

立花　うちが重視しているのはあくまでも会員同士の話し合い・ディスカッションです。何も啓発なんかしやしません。むしろその逆です。

ルリカ　逆？

立花　ええ。巷じゃあよく「地獄を見てきた人間は強い」なんて言うじゃないですか？　でも、その割に大抵の人間は地獄を見ようとなんてしない、周りもそうさせない。――優しいもんですよ、まったく！　落ち込んでいる人がいたらすぐに励まそうとするし、揉め事があれば距離を取ることをおすすめする……。そんなことで人間が育つんでしょうか？　育ちようがない。当然です。人間を育てるのは、ストレスだけなんですから。

一拍。

立花　うちの勉強会では、対話の場を通じてみなさんがそれぞれ課題を発見・克服し、自分の力で人生を切り開いていく、と、まあ、言ってみれば私はその討論の場を仕切る、スリムなマツコデラックスとでも言ったところでしょうか……。

ルリカ　（あいかに）なんか、ものすごい苦手なタイプなんだけど。

立花　よく、言われます。えー、さて……。

一拍。

立花　妹さんたちの立場から見れば、まりかさんは確かに、常識の無い対応をしていると映るんでしょう。「娘の結婚式ぐらい出るべきだ」、その常識はわかります。ですが、彼女はそれ

を望んでいない。で、あるならば、それはもう彼女の課題です。聞けば娘さんもそれを望んでおられないというのですから尚更です。ですが妹さんたち、特にそちらのル、ル……。

ルリカ　ルリカです。

立花　そう、ルーちゃんからすれば間違いなく後悔する案件だ、ということになっている。

ルリカ　（小声）ルーちゃん……。

立花　★いいですか？　過去と他人は変えられません。私たちに変えることができるのはいつでも、……自分のことと未来のことだけです。

あいか　おお、それっぽい……。

ルリカ　★だから未来のことを変えに来てるんじゃないんですか？

立花　ええ。しかし他人のことです。「（モノマネをして）他人じゃない、お姉ちゃんだ！」というお話はよくわかります。

ルリカ　そんな言い方してません。

立花　けれども、お姉ちゃんといえどもやはり、あなたにとっては一人の他人です。（調子を変えて）もちろん、あなたはあなたの倫理感に従って親切心から意見を述べた。そこまでは良いんです。ですがそのあとは、――あなたの提案を受け入れるかどうかという問題はやはり、まりかさん個人の課題です。ひょっとすると妹さんたちは、お姉さんの判断力を疑っているのかもしれません。ですが、お姉さんを愛しているのであれば、ぜひ、お姉さんのことを信じてあげて欲しいんです。……のちのち苦しむのかもしれません。後悔するのかもしれません。ですが、それは彼女自身の決めたことです。だからこそ責任が取れる。もし、妹さんたちの忠告に従ってまりかさんが結婚式に出る、そして結婚式が滅茶苦茶になる……。そんなことが起こったらどうします？　ウェデングケーキにまりかさんが頭から突っ込んで、逆上したゆみさんがキャンドルファイヤーで式場に火をかける……。火だるまの司会者……。炎に包まれたウェディングドレス……。逃げ惑うご親族ならびにご来賓の方々と、捨て置かれたオードブルを食べ漁る、僕……。

ルリカ　なんでそこにいるんですか！　あなた出席しないですよ。

あいか　ちょっと極端なんじゃないですかね、それは……。

立花　でも、可能性はゼロじゃない。もし、万が一にでもそうなってしまった場合、あなたたちに取れますかその責任を？　いいえ取れません。取れやしないんです。ですからお二人は、あとはお姉さんのことを信じて、待っていてあげてほしいんです。

あいか　まあ、割りとそうしようとは思ってるんですけどね、信じて待つっていうか……。

ルリカ　★あなたこそちょっと他人の「課題」に踏み込みすぎなんじゃないですか？

立花　私が？

ルリカ　だって関係ないですよね？

立花　それはご指摘の通りです。しかし、私は最初に、部外者である私が発言する権利はない、ということを宣言し、その上で発言の許可を求めました。私の発言を承認したのはあなたたちです。したがってそのことをあなたたちが今から覆すことはできません。

ルリカ　別にあたしは認めてませんけど？

立花　でも、反対しなかった。

ルリカ　……まあ、そうですけど。
立花　時に沈黙は賛成を意味します。「黙認」というやつですね。ルーちゃんはあいかさんが私の発言を許可した経緯を黙認した。それは賛成と同じことです。
ルリカ　（あいかに）やっぱ無理だ、この人。なんなの。
あいか　まあまあ……。（立花）それじゃここから先は許可しません。あなたの発言を。
立花　お、おう……。そうですか。
あいか　はい。黙っていてください。
立花　わかりました。その提案を受け入れます、部分的には。ただし／
あいか　★黙っていてください。

立花、あいかを指差して微笑む。

あいか　割りと扱いやすいタイプだと思うけど。
ルリカ　そうかな……。

鈴木チサ、再登場。

児玉　あれ？　どうしたの？
チサ　すみません、銀行のカード忘れちゃって……。
児玉　ああ。
チサ　ちょうどさっきのお買い物で現金使い切っちゃって。
児玉　ご苦労様―。
チサ　すみませんホント。すぐにあの、急いで行ってきますから、
児玉　そしたら今日はもうやめといたら？　（外の天気を指して）降ってきちゃったし。
チサ　んんー、でも行ってきますよ。
袴田　なんか台風来るって言ってましたしね。
チサ　あ、台風？　そうなんですか？
袴田　はい。なんか来る途中のラジオで。
チサ　うっひょーい。辞めます。今日はもう寝ます。
児玉　や、寝るな寝るな（笑）（ルリカたちに）どうします？　また、出直します？
あいか　どうしよっか？
ルリカ　んー。
袴田　帰るならこのタイミングだと嬉しいんだけど……。
ルリカ　でも、まだ何も結論出てないから。うん。

間。

大野　勝手にすれば。

▼音響：ＳＥ　雨音

一拍。

あいか　……大丈夫ですかね、それじゃ？

児玉　もう全然。その方がいいですよ。（運転の仕草をしつつ）夜は慣れない人だと、ね。

袴田　はい。ガードレール無いですし。

児玉　どう？　立花さんも泊まってく？

立花　ああ、いや、僕はまた、明日の準備もありますんで。

児玉　ゆっくり話しましょうよ。昼間のホラ、バドミントンの話の続きでも。

立花　いえいえ、本降りになる前に失礼いたします。それじゃ大野さんも、また。

大野　はい。また明日。

立花、退場。

▼音響：ＳＥ　雨音。

場面転換。

◎【山小屋】　４　あいかと袴田

袴田、電話のシーンの途中で舞台上にいる。

山小屋。雨が降っている。

そこへ、あいか、登場。空をあおぎ見て、

あいか　うわー。やっぱ泊まることにして正解だったね。

袴田　だね。

あいか、袴田の側に腰を下ろし、

あいか　なに見てんの？

袴田　（前方を指し）や、なんか、さっきからずーっと光ってるから。

あいか　雷？

袴田　じゃないのかなあ。ずーっと光ってんの。

あいか　ホントだ。

一拍。

あいか　なんかごめんね。いろいろ付きあわせちゃって。

袴田　ああ、別に……。前から決まってたことだし。

あいか　大丈夫なの、お店の方は？
袴田　ヘーキヘーキ。高野に全部任せてあるから。
あいか　おお、高野くん。頼もしいね。
袴田　少しは俺なしでも回せるようになんないと。

一拍。

袴田　あの、お義姉さん、まりかさんはさ、
あいか　うん。
袴田　お金はどうしてんの？
あいか　……さあ。
袴田　だって長いんでしょここ来てから？
あいか　うん。ま、でもずっと働いてたし、貯金があんじゃない？　旦那さんからも養育費はずっともらってたみたいだし？
袴田　ああ、養育費。そっかそっか。その娘さんてのはその、お義姉さんの子どもじゃないんだもんね？
あいか　そうだよー。ていっても、ゆみちゃんはもう、お母さんて言える人はお姉ちゃんしかいないからさ。まあ、実の娘みたいなもんだけど……。
袴田　ふーん……。あれ？　でも、今はお父さんと暮らしてるんでしょ、ゆみちゃん？
あいか　んーん。高校出てすぐ一人暮らしして。
袴田　あ、そうなんだ？
あいか　うん。なんかあんまり世話になりたくないみたいな感じで？　自立して。
袴田　おー、偉いね。
あいか　ま、偉いんだけどさ。お姉ちゃんにはかえってそれがしんどかったみたいで……。

間。

袴田　大変だね。姉妹（きょうだい）って。
あいか　ねえ……。ああ、そっか。（あなたは）一人っ子だから。
袴田　何を騒いでんだかちっともわかんなくって。
あいか　はは。そっか。そうだよね。……うちはお姉ちゃんが二人とも激しいから。
袴田　ね。だからあれだよね、
あいか　ん？
袴田　これで俺たちが別れるなんていったらお義姉さんたちまた大騒ぎすんだろうね。
あいか　やめてよ。ちょっと絶対言わないでよ、その話？
袴田　言わないって（笑）
あいか　……なに言われるかわかんないよそんなの。

一拍。

袴田　来れんのかねえ？　新郎新婦のお二人は。

▼音響：ＳＥ　雨音＋携帯電話、発信音。

◎【電話】　水川、大野

以下、電話のシーン。

水川　あ、もしもし？　水川です。

大野　ああ、どうも大野です。わかりますかね？　ゆみのあの……。

水川　ああ、お義母さん。わかるに決まってるじゃないですか、すみません先程は突然お電話差し上げまして……。

大野　こちらこそ出られませんで……。それであの、ちょっと小耳に挟んだんですけどね、水川さんこちらにいらっしゃるの、明日？

水川　ええ、そのつもりです。あー、あいかさんから？

大野　ええ、あいかからそう聞いて……。

水川　あー。

大野　それであの、ちょっとお願い、……というかなんですけどね、

水川　はい？

大野　今回はちょっと、見送っていただけませんでしょうか？

水川　いや、行きますよ。もう準備もしちゃいましたし。

大野　あ、そうですか？

水川　ええ。

大野　でもあの、ああ、そうですか？　準備？　でもあの、こちらには泊まる場所もありませんし、お布団もやっぱり／

水川　★いやいや、それはまた別に、旅館を予約しときましたから。

大野　ああ、旅館？　あ、本気じゃん。え、もう予約なさったの？

水川　ええ。しました。二人分。

大野　ああ、二人分？　え、それはあの、なんていいますか、やっぱり、ゆみも来るっていうことなんですよね？

水川　そりゃもちろん。

大野　そりゃもちろん、ってあなたそう軽くいいますけどね……。なんか言ってました？　ゆみは。

水川　……久しぶりに会うから楽しみだなあって。

大野　★ウソですよそんな！

水川　ウソじゃないですよ。ああ、代わりましょうか？
大野　いいですいいです！　そんな別に……すみません疑うようなこと言っちゃいまして。
水川　いえいえ。ま、とにかくあの、明日の昼過ぎにはそちら伺えるようにいたしますから。
大野　★や、待ってくださいよ、――着々と進めるな――それはちょっとあの、困るんです。
水川　はあ、困る？
大野　いやあの、象、象がですね、
水川　ゾウ？
大野　ええ、最近あの、象が、近所でもう暴れておりまして、そりゃもうすごい暴れ方で、興奮しちゃってましてねえ。もう、近隣住民をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、あの、鼻で、あの長いアレでパオーンつって、もう、ねえ。パオーンパオーンて言って阿鼻叫喚。

大野、大きく息をついたのち、

大野　まあ、嘘なんですけどね。
水川　でしょうね。
大野　いやその、心の準備といいますか、そういうのも整っておりませんし、なんていいますかそのォ、どのツラ下げて会うのかっていうこともありますし、
水川　そのツラでいいんですよ。むしろそのツラを下げてくださっていることが大事なんですから。
大野　★ちょっとあなた、ツラって言い方は失礼じゃないですか？
水川　★いや、お義母さんがそうおっしゃるから！
大野　★いいんですよそんなことは！　それより実は今、病気でして……。
水川　病気？
大野　ええ、熱が出てるんですよ、昨日から。
水川　それはいけない。
大野　そうなんです。ここんとこ調子があんまりよくなくって、さっき熱を測ったら三十九度五分！　もうそんな高熱はホントにちっちゃい、小象の時以来ですんで、
水川　え、え？
大野　ぶるぶる震えちゃって、もう寒気してね。グッタリと干し草の上に身を横たえて……。
水川　★これゾウの話なんですか？　ちょくちょくわかんなくなるんですけど。
大野　はい、その、近所の象が熱を……。
水川　（威圧的に）★近所のゾウが熱を？
大野　まあ……あの、出していないんですけどね。
水川　でしょうね。そのゾウ、暴れてるっていってましたからね。ちぎっては投げちぎっては投げ、って言ってましたからね。
大野　あの、……象はいないんです、本当は。
水川　わかってますよそんなこと！

大野　★とにかくいろいろあって、今は会える状況ではない！　と。……そんな感じですんで
どうかひとつ、見合わさしぇていただきゅということで……。
水川　ちょっとダメですよそんな！
大野　★いろいろあるんですよ、こっちも！
水川　★じゃあ、言ってくださいよ理由を！　ゾウの事情しか伺ってませんよ？
大野　いや、だからまあ……なんていうんですか、実際熱っぽいのは事実で、ああー、なん
か、熱っぽい、ホントに。なんかふわふわしちゃう。
水川　それじゃ差し入れ持っていきますよ。おでこがひんやりするシートでも買って行きまし
ょうか？
大野　いえいえ！　もうそれは全然、お気遣いなくって結構なんですけど、
水川　近くに薬局がなくて困ってるんじゃないですか？
大野　ま、それは実際そうなんですけどね……あら、よくわかりますね？
水川　じゃあ、他にも欲しいものあったら言ってください。
大野　あ、あたしが？
水川　はい。
大野　……ウェット・ティッシュ？
水川　はい。わかりました。ウェットティッシュ。他には？
大野　あの、ゆみはその……。

一拍。

大野　会いたくないと思うんです。
水川　そんなことありません。
大野　いや、水川さんはそうおっしゃいますけどね、あの子本人は会いたくない、というと思
うんですよ。
水川　言ってませんよ。
大野　そうですか？
水川　ええ、代わりましょうか？
大野　いいです・いいです！　いいんですホント！

一拍。

水川　万事うまくいくように僕がちゃんと話を進めますから。ご安心ください。
大野　ご安心ください、って言われてあなた、そんな簡単になんでも安心できます？
水川　ええ。僕はそう言われたら安心することにしていますよ。
大野　――そうですか。
水川　そうですね。
大野　んー。素直。

水川　はあ、素直……なんですかね？

水川　それじゃあ、また明日。▼楽しみにしてますから。

大野　ああ、はい。

水川　失礼しまーす。

大野　ごめんください。

電話、切れる。※水川が先に退場。大野は舞台上をいったん横切ったのちに退場。

▼音響:SE　雨音が強くなっていく。

音のない雷。

【4】

【山小屋】

◎【山小屋】　5　小屋の朝

翌朝。
山小屋の外に袴田がいてタバコを吸っている。少し離れてルリカ、コーヒーを飲んでいる。
さらに離れたところにチサ。掃き掃除をしている。
そこへあいか、登場。寝起きである。

袴田　おはよ。
あいか　おはよー。寝れた、ちゃんと？
袴田　うん。快眠快眠。
あいか　すごいね。なんかあたし虫がすごくて……。
袴田　刺された？
あいか　それは大したこと無かったんだけどなんか、音が……。
袴田　ああ。
あいか　あれ、お姉ちゃんは？
袴田　さあ？
ルリカ　どっか行ったんじゃない？
あいか　なに、どっかって？

ルリカ、首を傾げる。

あいか　知るわけないか。
ルリカ　うん。
チサ　勉強会じゃないですかね？
あいか　え？　ああ、おはようございます。
チサ　おはようございます。
あいか　勉強会ってなんか、昨日の人が言ってたやつですか？
チサ　はい。週末はいつも勉強会のみなさんでディスカッションをやってるから、多分、それじゃないですかね？
あいか　ああ、そうですか。
チサ　でも、よく来ましたよねえ、こんなとこ。いくらお姉さんのためっていったって、ねえ？
あいか　大変だったでしょう？
袴田　まあ、はい。そうですね。
あいか　思ってたよりは遠かったっすねえ。

チサ　よく住んでますよねえ、こんなとこ。
袴田　……え？
チサ　ああ、あたしも全然地元ってわけじゃないんで。
袴田　そうなんですか？
チサ　はい。
あいか　あ、あたしてっきり……。
袴田　俺も俺も。
チサ　ねえ。よく言われるんですよ。なんか地元顔なんでしょうね。
あいか　はは。
袴田　地元顔って（笑）
ルリカ　結局あれですよね……姉がこんなとこ来ちゃったのもその、勉強会のためなんですよね？
チサ　まあ、大野さんがどういう経緯でいらしたのかはわからないですけど……。
ルリカ　★あなたも勉強会に参加してるんですよね？
チサ　いや、全然。あたしはだって、「うつ」じゃないですし。
袴田　ああ、「うつ」の人が参加するアレなんですか？
チサ　多分、そういう感じの人が？　まあ、あたしもよくわかんないんですけどね。児玉さんについてここまで来ちゃっただけなんで。
あいか　それってあの、おじさんのことですよね？
チサ　そうですそうです。児玉さんがなんか、勉強会に参加したいっていって……。
袴田　ご夫婦か何かなんですか？　お二人は？
チサ　いやいや！　ぜんぜん！　そういうんじゃないんです。あの、そういうんじゃなくて……パン屋さんで、児玉さんがあの、パンを作っていて、すごくおいしいやつを。
袴田　パン？
チサ　はい。それであの、あたし、ここ来る前に児玉さんのお店でちょっと働いてて、それでなんか、児玉さんがお店閉めちゃうっていうんで一緒についてきて……。
袴田　ええー？　バイト先の店長にってことですよね？
チサ　まあ、そうですね。そういうことになりますけど、
あいか　え、つきあってるとかじゃないのに？
チサ　そういうんじゃないですって！　だからまあ、……ファンというか？　元々は単にお店の常連だったんですけど、そのうちなんか、流れで手伝わせてもらうようになって……。
袴田　それでここまで？
チサ　はい。
あいか　ハー。すごいですねなんか。
チサ　はい。すごい人なんですよ、本当に。だってあれですよ、週三日ぐらいしかお店開けてないのにもう、お客さんズラーって並んじゃって。すごい人気だったんですから。
あいか　そういう意味じゃなかったんですけどね。

チサ　（悲しく）だからすっごいショックだったんですよ、コダマックスが閉店するって聞いた時は……。「あたしの朝の楽しみがあー」とか思って。

あいか　コダマックス……。

袴田　どこでも一緒だと思っちゃうんですけどね。パンなんて。

チサ　いやいやいや！　違うんですよコダマックスのパンは！　小麦のこう、活かし方？　ていうか、活かされ方？　小麦が喜んでるっていう感じがして……。もう全然違うんです。香りが違うっていうのはもちろんですし、味もそう……なんていうか、こう、やわらかさ？　んー、やわらかければいいってもんじゃないんですけど……もちもち感っていうか、しっとり感ていうか……あ、無駄なものが入ってない感じ！

あいか　はいはい。

チサ　なかなかいないと思うんですよね、あそこまでパン愛に溢れた人って。滅多にいるもんじゃない。

袴田　ここにもう一人見つけたって感じですけどね。

あいか　パン愛……。

袴田　え、じゃあ、どうして閉めちゃったんですか、その、コダマックス、でしたっけ？

チサ　だからまあ……疲れちゃったっていうか？

あいか　週三日なのに？

チサ　（散々その言葉を聞いてきた、という風で）いやいやいや、そう言いますけどね、確かにお店開けてるのは週三日でしたけど、いろいろ研究とかしてすっごい忙しかったんですよ。児玉さん、パンに関しては滅茶苦茶ストイックというか、ガーッて（集中のジェスチャー）なっちゃう人なんで、あたしもう、これ以上無理したらパンに殺されちゃう、って思って。これじゃもう、パンと児玉さんとの命の削りあいだなって。パンに殺されちゃう、パンに殺されちゃう、って。

ルリカ　ちょっとごめんなさいね。あのねえ、えー、……殺されませんよ、パンには？

チサ　いや、ですから……なんで怒ってるんですか？

袴田　★（ルリカに）いやいや、お義姉さん、

ルリカ　ちょっとあまりにも強烈なパン愛で……。

袴田　お気持ちは、はい……。

チサ　でも、安心してください。こっち来てからは児玉さんも随分変わりましたんで、もう殺される心配はなくって。

ルリカ　ないよ最初から！　パンはそういう危険物とかじゃなくて、んー……食べ物です。

チサ　はい、食べ物です。パン。

一拍。

袴田　（ルリカに）やめましょうお姉さん、迷路です、迷路。

チサ　あ、なんだったらちょっと覗いてみます？

ルリカ　遠慮しときます！

チサ　ああ、いや、パンのあれじゃなくてその、勉強会を……。
あいか　あ、見学とかできるんですか？
チサ　はい、多分。わりとオープンな感じなんで誰でもウェルカムって感じですけど。
あいか　（ルリカ）どうしよっか？

一拍。

ルリカ　どうせここにいてもパンの話聞かされるだけだしね。
あいか　確かに……。
ルリカ　それじゃ案内してください。
チサ　はい。それじゃ、ちょっとあの、あたし、準備してきちゃまますから。それ、もらいますよ（ルリカと袴田の持っているコップをもらう）……。

チサ、退場。
入れ替わりに、水川、ゆみ、登場。水川はウェットティッシュを大量に持参している。

ゆみ　ルリカさん……。
ルリカ　おお、あの……。
水川　どうもはじめまして。水川です。あいかさんもどうも。
あいか　ああ、ねえ。（ルリカを指して）姉です、姉。
水川　ああ。
ルリカ　☆あー、お電話ではね。わざわざすみませんなんか。
水川　いやいや、こちらこそ、いろいろお世話になっちゃって。
ルリカ　全然。もうね、大変な姉でホントに。
あいか　☆（ゆみに）まあ、ねー、きれいになっちゃって。ゆみちゃん。
ゆみ　はは。どうも。お久しぶりです。
あいか　おめでとうねー。ホントこの度は。
ゆみ　いやいや、ありがとうございます。

袴田、躓いて転びそうになる。

袴田　大丈夫です。
ルリカ　（水川に）あー、ちょうどいいや、あのね、今ちょうどお姉ちゃんに会いに行こうって話になっててさ。
水川　ああ、居らっしゃらないんですか？　ここに？
ルリカ　いや、居るんだけどさ、なんていうの、今は勉強会に行ってるらしくて。ホラ言ってたじゃない、なんか宗教みたいなやつにハマってんじゃないか、っていって。

水川　ええ、ええ。あ、その現場に？
ルリカ　そうそう、現場に行ってみようって話になっててさ。
あいか　一緒にいく？
水川　まあ、はい。じゃあ……。
ゆみ　あたしはいいや。
水川　あ、そう？
ゆみ　うん。あれ、戻って来るんですよね、母は？
あいか　まあね、住んでるみたいだし。
ゆみ　ああ。（水川に）じゃあ、こっちで待っとくよ。
水川　ふーん。そう。
ルリカ　まあ、無理にとは言わないけど……。水川さんは一緒に来るのよね？
水川　はい。じゃあ僕は。

チサ、再登場。

チサ　お待たせしましたー。あら、どうもこんにちは。
水川　ああ、どうも。
ゆみ　こんにちは。
あいか　（チサに）ああ、姉の娘さんで。
チサ　あ、えー？　そうなんですか？　はいはいはい。
ルリカ　それじゃ、行きましょうか？

水川、ゆみに荷物を預ける。
ゆみ以外、退場。

▽**袴田**　どんぐらいなんですか？
▽**チサ**　もうホントすぐです。車で五分ぐらい行ったところで。
▽**袴田**　ああ、じゃあ、近いですねえ。

▽**ルリカ**　何で来たの？
▽**水川**　あ、車です。
▽**ルリカ**　大変だったでしょう？

ゆみは別方向に退場。
場面転換。

【診察室】

◎【診察室】　その２

翌朝。早朝。
診察室。
立花は机に向かい、天城に背を向けて何やら書いている。
そこへ、海野が天城を案内するように入ってきて、椅子をすすめる。

海野　どうぞ、こちら。
天城、黙礼して椅子に座る。

海野　それじゃ、おはようございます。
天城　あ、おはようございます。
海野　いかがですか？　近頃？
天城　や、まあ、ぼーっと。
海野　うんうん。寝れてます？
天城　ああ、まあ。寝れたり寝れなかったりですけど。
海野　食欲は？　食べてます、ちゃんと？
天城　やあ、そんなに。まあ、もともとそんな食べるほうじゃないですけど……。
海野　外に出たりとか、運動はなさってます？
天城　はい。こないだそう言われたんで散歩とか、ジョギングなんかしたり。
海野　いいですねそれは。グッドですよ。グッド・デザイン賞をあげます。
天城　……ありがとうございます。まあ、「しろ」って言われましたんで……。
と、立花が振り返って天城の方を見て、

立花　別に「しろ」なんて言っていませんよ。ただ、運動もたまにはいいですよ、って軽い提案をしただけです。
天城　ま、でも、要するに走れって意味ですよね？
立花　天城さん、それ辞めましょう、「要するに」って、……要約しないでください。だいたいね、人生なんてなんの意味もありゃしないんですから要約しちゃったらつまんないことばっかりですよ？
天城　はあ。
立花　恋愛だってまあ、要するにセックスしたいんですね、とか。仕事してるのだって、要するにお金が欲しいんですね、とか。何もかもが虚しくなってしまう。
天城　気をつけます。

立花　うん。気をつけて。
天城　それでどうなんです？　立花さんは近頃？
立花　ん？　ああ……。
天城　いかがですか？

一拍。

立花　海野さん、外、誰もいないよね？
海野　え？　ああ、はい。もう大野さんがお待ちですけど。
立花　ああ、大野さん。大野さんはまあいいか。まあいいや。海野さんあれだ、あのー、ちょっと話し相手になってあげて、大野さんの。
海野　まあ、いいですけど……。
立花　まだディスカッションまで少しあるからさ。どっか散歩でもいっといでよ。
海野　ああ、はい。散歩？
立花　うん、そう、散歩。（海野に近づいて退室を促しつつ）まあ、ね、散歩。まあ、ちょっと、散歩。いいからいいから。その……ね。
海野　わかりました、わかりました。

海野、追われるようにして、退場。

◎【診察室】　その3

天城　そんで？　具合はどう？
立花　もう最悪だよ。最悪。それよりあれだ、あのー、忘れないうちにあの、
天城　ああ、そうだったね。

天城、カバンから薬の入った袋を出し、それを立花に渡す。
立花、その中身を確認しつつ、

立花　んー、ヂパスと、レクサプロ。いいね、この医者は。ぜんぜん出し惜しみせずパッパと出してくれる。
天城　そりゃね。薬で患者がよくなるんだったらそれに越したこたないよ。薬も売れる、患者も喜ぶ。

立花、早速薬を飲む。

天城　あんまり飲みすぎないほうがいいんじゃない？
立花　何をもって適正な量かなんて君にはわからないだろ？　医者じゃあるまいし。

天城　古いやつから飲めばいいじゃない。
立花　そうなんだけどね。やっぱ新鮮な奴のが効くような気がして。
天城　薬が切れたってわけじゃないんだろう？
立花　★（驚いて）当たり前だろ！　薬が切れるなんてそんな……。そんなことにだけはならないように気を遣ってんだから。薬が切れるって、そんなまさか。

一拍。

天城　講演会のほうはやってるの？
立花　やってるよもちろん。もうあれだ、平日は大体・飛行機でどっかに飛んでってる。
天城　へー。
立花　講演会となりゃどこなりと。西へ東へひとっ飛びだ。
天城　ちゃんとやれてるのか？
立花　まあ、おかげ様でね。――ハハ。なにせこっちは「先生」なんだから、しっかりしたところを見せなくちゃいけない。立派にやってるってとこを見せなくちゃいけない。
天城　もう講演会一本で食っていけばいいんじゃないの？
立花　ダメだよそんな。ダメダメ。
天城　どうして？
立花　この場所があるってことが説得力なんだよ。わかんないかな……。わざわざこんな山奥に引きこもって、タダ同然の勉強会をしぶとく続けてる、そういうのに弱いんだよ、みんな。
天城　みんな？
立花　だから世間のみなさんだよ。そう、世間のみなさんは大抵、代わり映えのしない日常を過ごしてるだろ？　だから、自分だってそういう毎日を積み重ねていけば、いつか思わぬ成果が出るかもしれない、って、そう思いたいんだ。
天城　そんなもんかねえ。
立花　そんなもんなんだ。あー、講演でよくやる話でさ、「ゴミ拾い運動」の話ってのがあるんだけどね、
天城　うんうん？
立花　とあるアメリカの学校に一人の少年が居てさ、その子が自分の学校のゴミの多さにうんざりしてたんだ。空き缶、ペットボトル、古雑誌……、もう学校中、ゴミだらけなんだ。そこで、その少年はある日、一日一つだけゴミを拾う、ってことを決めて、毎日それを続けたんだ。
天城　えらいね。
立花　でね、その少年がたった一人で始めたその運動はやがてその子の担任に伝わって、クラス全体の取り組みへとつながっていく。さらには学校全体、地域全体へと広がっていって、かくして、その地域は街中至るところ、信じられないぐらいキレイになりましたとさ、ってそういう話なんだ。まあ、嘘なんだけどね。
天城　ええ？　嘘なの？

立花　嘘だよ。でも、構いやしないんだ。だって、この世のどっかには実際そういうことが起きた地域もあるかもしれないんだからね、完全に嘘とは言い切れない。
天城　適当だな……。そんなんでいいの講演会って？
立花　いや真剣だよ。細かいエピソードなんかどうだっていいんだ。だけどメッセージは本物だよ。そう。本物のメッセージ。
天城　それがなに、「投薬に頼らない精神医療の確立」？

間。

立花　軽蔑してるんだろ（俺を）？
天城　いや、そんなことは……。
立花　してるんだろ。まあ、その辺は正直にいってくれよ。
天城　いつでも正直なつもりだけどね、
立花　それがもう嘘じゃないか。
天城　本当だよ。言いたくないことは言わない、関わりたくないこととは関わらない。それが正直じゃないのか？

一拍。

天城　最初はよくわからなかったんだ、君のことが。「どうしてそんなに他人の人生に興味を持てるのか」？
立花　普通のことだろ。
天城　そうなんだろうねえ。なぜだか「世間」のみなさんは他人に興味を持つことが大事なことだと思っている。尊いことだと思っている。「恋愛感情」っていうのだってそうだ。単にセックスをしたいだけなのに、どうしてそんな理屈をつけなきゃいけないんだろう？
立花　なんだって味つけが必要なんだ。人生ってものはね。
天城　――かもしれない。ともあれ、僕は君のことを軽蔑なんかしてないよ、本当に。いや、きっと最初はしてたんだろうけど、多少は。でも、今はむしろ、尊敬しているよ。
立花　やめてくれよ、そんな。

一拍。

天城　いいかい？　立花さんは病気なんだ。僕も病気だったからよくわかるよ。立花さんの病気は、まったく少しも治ってない。
立花　どうしてそんなことが言える？
天城　健康な人は薬なんか飲まないだろ？
立花　はは。じゃあ聞くが、いったいなんの病気だっていうんだ？　え？　病名はなんだ？

天城　双極性障害、あるいはうつ病。……そしておそらくは虚言癖と誇大妄想を併発。ひょっとすると若干の統合失調症が絡んでいる。

立花　なんだいその幅広い診断は？　そんなもん雑なプロファイリングと一緒だよ。「犯人は二十代から三十代、あるいは四十代から六十代、ひょっとすると十代の人間と思われる」なんつってな！　そこらをほっつき歩いている人間を捕まえてきて、「あなたは自己愛性パーソナリティー障害ですね」なんて言って回るのと同じだよ。誰だってあるんだ、自己愛も、パーソナリティも、障害も！

間。

立花　いいんだよ。現実にそうなっていなくても理想を持つことが大切なんだ。

天城　好きにすればいい。……大分儲かるんだろ、講演会って？

立花　まあね。山で白菜作ってるよりは儲かるよ。ああ、そうだ、今度いっぺん天城くんも来てくれよ、講演会。

天城　僕が？　遠慮しておくよ。

立花　なんで？　そんなこと言わずに、ぜひさ。

天城　勉強会のメンバーにでも来てもらったらいいじゃないか？

立花　ダメダメ。

天城　どうして？

立花　いや、別にあいつらのことを悪くいうつもりはないよ。ないけども、まあ、なんだ。僕の考えていることをとても理解できるような人たちじゃないんだ。

天城　僕だってわかってないよ、何も？

立花　だけど、部分的にでも僕の苦しみというかさ、まあ、何だ……。何と戦っているのかっていうことをわかってくれるじゃないか、天城くんは？

天城　さっぱりわかんないけどね？

立花　いや、なんていっていいか、わかってもらえてるっていう確信があるんだよ。理解していると思うよ、君は。

天城　わかってないって言ってるのに……。

立花　いいよもう、それは。まあ、とにかく、講演会に一度来てくれよ。君が来てくれるだけで僕は安心するんだから。

天城　まあ、考えておくよ。それよりホラ、

立花　なに？

天城　お金。

立花　ああ、ごめんごめん。お金、お金だったね、これは大切だ。お金。大事なことを忘れてた。

立花、天城にお金の入っているらしき封筒を渡す。それなりの厚さがある。

立花　いや、いいんだ中身は。今日はちょっとまた多く入れておいたけど、これは僕にとってものすごく大切な投資なんだ。君がいなかったらもう僕はあれだ、破滅だ。死ぬしかない。

天城　大げさだよ。

立花　大げさじゃないんだ！　こんなこと頼めるのは天城君ぐらいしかいないんだから。

天城　ふーん。結構簡単だけどね、薬をもらうぐらい。

立花　いいや、病院に足を踏み入れるだけだってリスクなんだ。誰がどこで見ているかわからない。だからそれはそれで、ちゃんと毎回受け取ってくれ。

天城　そうさせてもらってるよ。

立花　うん。それじゃまた、きっと。

天城、席を立って、出口の方へ。

天城　今日は午後から、ディスカッションってのがあるんだろ？　勉強会のみなさんと？

立花　ん？　ああ、そうだよ。土曜と日曜とやっている。

天城　なんだったらそれに顔を出すよ。

立花　（驚いて）いやいや、それはダメだ。来るんなら講演会に来てくれ。ディスカッションはダメだ。あんなところに君がいたらもう、僕は何もしゃべれなくなっちまう。

天城　せっかくここまで来たのに……。

立花　お気持ちはありがたいんだけどね、またの機会にしよう。いや、講演会。講演会に来てくれやっぱり。

天城、退場。

立花、舞台上に一人残って両手で顔を覆う。気を取り直して、

場面転換。

【勉強会】

◎【勉強会】　その２

再び勉強会の場。

立花　さて、昨日は「うつ」は治る必要があるのか？　という話から発展して、「べき思考」の他者に対しての適用、――すなわち「怒る」とか「叱る」ということについて話し合いました。今日はその続きから行ってみましょうか。えー、柚木さんは確か、「怒らなきゃいけない」という場面で困ってしまうんでしたよね？

柚木　はい。

立花　具体的に今、柚木さんの生活にそういう場面がありますか？

柚木　そうですね。……まあ、あの、あたし今、地元で吹奏楽のサークルをやっているんですけどね、結構、実力とかやる気とかみんなバラバラで……。

桜井　はいはい。

柚木　あたしはあの、習い事でずっとピアノやってたんで、それなりにできる方なんですけど、けっこう下手な人たちこそダベってたり、サボってたりするんですよ。

平井　わかるわー、それ。

桜井　★ねえ。

柚木　でもあの、そういう人たちってすっごい和やかで、「ウェーイ」とかいってる感じなんで、なんか「ちゃんとやってください」とか言うの、もう無理で……。

桜井　どうして？　言うしかないでしょだって。

柚木　それが言えないから困ってるんじゃないですか……。

桜井　まあ、そうか……。そうだよね。

児玉　でも、そこ大事だよね。なんか理由があって怒りたくないわけでしょ、柚木さんは？

柚木　そうですね。理由っていうかまあ、なんか嫌だな、ってだけなんですけど。

平井　ま、単純に人を怒るっちゅうだけで疲れるしな。

柚木　そうなんです。今、ちょっとうまい人達が抜けて、あたしがパートリーダーっていうか、リズム隊のリーダーみたくなっちゃって……。

平井　やあ、それめっちゃわかるわ。あの、あ、ちょっとしゃべってええ？

柚木　ああ、どうぞどうぞ。

平井　ホラ、よく出世して「うつ」になるってありますやん？　あたし、あれめっちゃよくわかって。だってもう、プレッシャー！　そんで人が和んでる時とかって、どこまで割り込んでええか全然わからへんし。まあな、勤務中はくっちゃべってんと仕事するべき、ってこれ、当たり前の話やねんけどな。

桜井　だからそういう「べき」は、有って良い「べき」なんだよ。そんなねえ、みんなで職場来て今日もおしゃべり楽しかったね、とかそんなんでいいわけないじゃない？

児玉　そりゃ成立しねえな。確かに。

平井　せやから注意するんやけど、そんで、その人らが大人しく、「すんませーん」てことになってくれたらええんやけど、そういう人らってけっこう逆ギレっちゅうか、「私だってやってます！」みたいんなったりして、「ええー？」ってなるんですよ。

柚木　そう、それなんですよ！

平井　でも、そこでなんか「おかしいことといいました、あたし？」とかいうてもうたら、完全にケンカやん？

海野　そうっすねー。

柚木　そういう、ケンカとかは無理です絶対。

平井　なあ？

柚木　はい。疲れちゃいますし。

立花　そのあたりは「課題の分離」って言葉がありましてね。

桜井　アドラー。

立花　そうそう。アルフレッド・アドラー。

海野　（大野に）誰ですかそれ？

平井　え、心理学者。

海野　ふえー。

立花　あえて単純化して言えばその場合、「自分が善意で注意しているかどうか」ってことだけを気にすればいいわけですよ。注意をするときに自分が単にイジワルで言っていたり、揚げ足取りみたいな注意をしていたら、それは不必要な注意です。そういう関わりは持たなくていい。

桜井　うんうん。

立花　でも本当に大切で、正当な注意をしている場合もあるわけです。それは必要なんだからした方がよい。そういう時にしっかりと相手への善意――まあ、もっと言えば共同体に対しての貢献――そういったものがちゃんと自分の中にあるのかどうか。そこだけを問題にすればいいんじゃないでしょうか。

柚木　うーん。

一拍。

平井　え、ほんならそれ、何を基準に判断したらええんですか？

立花　基準？

平井　だってまっとうなこと言っても逆ギレする人はおるわけやないですか？　ほんなら誰にとってまっとうやったらええんですか？　「自分」？

立花　いいご指摘です。確かに、共同体の利益を考え、かつ、相手に対して愛をもって正しい注意をしても、相手がキレる場合はあります。恨まれる場合はあります。

平井　はい。

立花　それは相手の課題です。なので問題にしません。そこから先は相手が決めることです。

平井　うーん。そういうもんですか……。

柚木　なんか人のせいにする、みたいになっちゃいません？
立花　時には人のせいにしてもいいんです。だってそうでしょう？　世の中のうまくいかないことはなんでもかんでも自分が悪い、なんて、そんなことあるわけがない。
児玉　ま、どう考えたって受け取り側の問題もあるわけだからねえ。
立花　そうですそうです。
柚木　んー。

◎【勉強会】　その３

立花　では、ここでちょっと話を広げてみましょうか……。
柚木　はい。
立花　怒らなきゃいけない相手に対してこっちも感情が乗っている場合はどうでしょう？　つまり、十分に愛があるからこそ怒っている、という場合ですね。
桜井　それは、サボっている人が自分の好きな人だった場合ってことですか？
立花　それでもいいですし、もっと別の場合についても考えてみましょう。課題を分離していく際に、「はい、自分はちゃんと伝えました。あとは受け取る側の問題です」と、そう簡単に割り切れる関係だったらいいんです。上司と部下にはそういうわかり易さがあったりもする。……ですが、家族や友人、恋人だったらどうでしょうか？

一拍。

児玉　そこはバランスじゃないすか？　「課題の分離」もほどほどに。
大野　いや、でも……。

一拍。

大野　相手にものすごく期待してる場合って、たとえば友人とか恋人とか、まあ、親子とか……。そういう時ってどうしても、こうなってほしい、こうしてほしい、っていう期待が強いわけじゃないですか？　そういう関係の中で「課題の分離」なんて、できるんですかね？
桜井　それは難しいですね、確かに。
平井　うん。
大野　だからどうしても、いったん距離を取るしかない関係、っていうのもあるんじゃないですか？

間。

柚木　私は、あると思います。だって、言ったってわからない人はどうせわかってくれないんですから……。

立花　それで済む関係もあるでしょう。でも、そうはいかない関係もあるはずです。いったん距離をとった結果として、「相手に何も期待しない」という状況が産まれてしまえば、愛情関係は壊れてしまいます。大野さんの言うようにいったんは距離を取るとして、では、いつまで距離を取り続ければいいんでしょうか？

大野　いつまで？　いつまで……。

柚木　別に「いつまででも」っていうんでいいと思いますけど……。

平井　いや。家族やったらそうもいかへんのちゃう？

柚木　性格の合わない親子だっていますよ。

立花　大野さん。

大野　はい。

立花　差し支えなければこの話題はちゃんと大野さん個人のこととして話した方がいいですよ。いや、もちろん匿名の一般論でもいいんですが……。

大野　そうですか……。そうですよね。

立花　はい。おそらく。

大野、立ち上がって、

大野　私とあの、娘の話なんですけどね。娘はその、何もわがままは言わない子でした。いつもいい子で、文句も言わないし。そう、あたしが仕事人間だったもので、娘としていた約束とかもしょっちゅう破っていたんですね。それで、……多分そんなことを続けていたからだと思うんですけど、娘はだんだん何も言わなくなってきちゃったんです。ぜんぜん怒ったりとかもしないし、そういうだから、感情的にぶつかりあうようなことをぜんぜんしないんです。私が悪いんですよ、私が悪いんですけどね、ぜんぜん関わってくれないっていうか、もうだから、今更あたしが関わってもどうしようもないんです。単なる迷惑なんですよ。だって娘は、あたしには何も期待していないわけですから。

平井　んー。そんなことないと思うけどなあ。

桜井　血のつながりがあるわけですし。

平井　そうそう。

大野　血のつながりは無いんです。あの、夫の連れ子でしたんで。

桜井　……なるほど。

児玉　そりゃまた難しいね。

一拍。

柚木　……それは、大野さん自身が何を望んでるか、ってことが大切なんじゃないですか？

大野　え、誰に対してですか？

柚木　自分に対してです。自分がどんな人間でいたいのか、っていう……。

大野　そういう難しいことはよくわかんないですけど……。望みっていったらまあ、ゆみとはなんか、普通の親子みたいにしたかったんだと思います。
平井　普通の親子いうんもまたいろいろやけど？
大野　だからあの、お話をしたかったんだと思います。いろいろ。なんでも。
桜井　でも、――別にしてたんじゃないですか、お話は？
児玉　ねえ。
大野　いや、まあ、してましたけど……。なんていうか、もっとちゃんとしたお話を。
桜井　ちゃんとした？
大野　うーん。私が悪いんですけどね、言えないんですよ、あの子はもう、何も。本当にしてほしいことは何も言えないんです。私に対しては。
平井　遠慮しとるちゅうこと？
大野　そう、ですね。なんかものすごく遠慮してるんです。
桜井　それが嫌なんですね？　大野さんは？
大野　まあ、でも、あの子のそういう、……求めているものに何も応えてあげられなかったのは私ですから。そりゃ向こうだって諦めるよなあ、とは思うんですけど、
桜井　でも、大野さんはまだ諦めていない？
大野　いや、諦めてるんですよ多分、私だって。
児玉　それにしちゃ、何か苦しそうじゃない？
平井　なあ。
大野　まあ、別に苦しいとかそんな大層なことじゃないんですけど……。
立花　いやいや、そこで誤魔化しても意味がありません。そういうことを言ってもいい場所なんですよ、ここは。
大野　ああ、そうでしたね……。すみません。
立花　謝らなくていいんです。誰だって誤魔化したい。最初からなんでもオープンに話せる人だったら、こんなとこに来る必要は無いんです。
大野　はい。そうですね。はい。

一拍。

立花　整理しましょう。大野さんは、娘さんが自分に対して何も求めてくれない、ということを残念がっている。まあ、簡単に言えばそれを寂しく感じている。そうですね？
大野　まあ、そういうことになるかと思います。
立花　じゃあ、逆に大野さんはゆみさんに対してどんなリクエストを出して来たんでしょう？
大野　私が？
立花　そうです。娘さんに対して何を求めて来たんですか？
大野　いや、んー。何かリクエストがあったら応えてあげたいなって、まあ、応えてあげられてなかったんですけど……。

立花　それじゃ答えになっていません。いいですか？　大野さんは、ゆみさんに対して何を求めて来たんです？

大野　何も……求めていなかったのかもしれません。

立花　（残念そうに）それじゃあ、寂しかったでしょうね、ゆみさんも。

大野　（反省して）はい。その通りですね。

立花　いや、違います。あったはずなんです。それを探しましょう、一緒に！　何か、大野さんはゆみさんに対して、こうしてほしい、とかそういうのを伝えたことは無いんですか？

間。

大野　最初、

立花　はい。

大野　まだ、一緒に暮らすようになってから少しして、ぐらいの時期なんですけど……。何でもいいたいことがあったら言ってね、って。そう言いました。我慢しないで、嫌なことは嫌、何かして欲しいことがあったら、して欲しいって、ちゃんと言ってねって。

立花　すばらしいじゃないですか。ものすごくシンプルでわかりやすいリクエストですよ。

大野　はい。

立花　「何でも言いたいことがあったら言ってほしい」。うん。……では逆に、大野さんはゆみさんに対して何でも言いたいことを言ってきましたか？

大野　さあ……。そんなにまあ、もちろん子どもですし、私がわがままを言うってことはありませんでしたけど、

立花　では、ゆみさんのわがままはなんでもすべて聞いてあげていた？

大野　いや、そんなことはありません。むしろ、全然聞いてあげられなかった。どっかに連れて行ってあげるとかも全然できませんでしたし……。

立花　そういう時、なんて言い訳をしていたんです？

大野　いや、まあ、いつも仕事が仕事が、って……。そんなことしか言ってなかったのかもしれません。本当は一緒に行ってあげたいんだけど仕事があるからさ、とか。いや、実際に行きたいっていう気持ちはあったんですけどね……。

間。

海野　それじゃあ、……ゆみさんは我慢するしかないっすね。

立花　はい、海野さん。もう少し詳しく。

海野　だってあの、大野さんが、自分でどうしても仕事をしたい、協力して欲しい、って言ってくれたらなんか、反論とかもできると思うんすけど……。でも、「仕事があるからそうしなくっちゃ」って、そういう感じで来られたら、もう、何も言えないじゃないっすか？　仕事を辞めてって言えないですし……。

大野　はい……。そうだったのかもしれません。

海野　いやあの、そんなぜんぜん、固い感じで大野さんを責めるアレは無いんですけど。

桜井　（海野を示しつつ、大野に）柔らかいですよ。

大野　ああ、いや、責めるなんてそんな……。ありがたいぐらいです。ありがとうございます。（海野に向かって頭を下げる）

海野　いえいえ、そんなそんな！

一拍。

立花　さて。大野さんは娘さんに対しては、「言いたいことを言ってほしい」といいつつも、自分はそうしてこなかった。……結果として、ゆみさんに対する不満を抱えていった。

大野　★不満なんてありません！　ただ、悪いなあ、っていう、そういう思いだけです。

立花　そうでしょうか？　悪いなあ、だけだったら大野さんからゆみさんへのリクエストがまたゼロになってしまいますよ？

大野　ああ、そうか……。

立花　どんな不満があったのか？　よく考えてみる必要があるんです。「不満」という言葉が嫌だったら別に何でもいい。実際に大野さんは、ゆみさんに対してどう在ってほしかったのか？

大野　わかりません。そんなことは……。

間。

児玉　さっき自分で言ってたんじゃない？　何でもいいたいことがあったら言ってほしかったんでしょ？

大野　はい。そうです。

児玉　そんで、ゆみさんはなんでも言いたいことを言ってたの？

大野　いや、言ってくれません。それはでも、

児玉　うん。

大野　それはだって……。んー。

児玉　「私が悪い」？

大野　★はい。

児玉　まあ、それはいったん置いとくとしてさ。なんでも言って欲しかったんだよね、大野さんは？

大野　はい。そうして欲しかったんだと思います。

児玉　それじゃねえの、不満って？

平井　ああ、なあ。

一拍。

立花　では、大野さんはその不満を、ちゃんとゆみさんに伝えていましたか？
大野　いいえ。それはそんなに、強くは言えませんでした。
立花　どうして？
大野　だってそんな……。たまになんか、言うこともありましたけど、むしろ私の方が聞く耳を持っていないような状態でしたから、
立花　全部自分のせいにしてはいけないんです。「過度の個人化」です。
大野　そうですけど、でも、
立花　ここはあえて自分のことは棚にあげて。わがままになって言ってみてください。
大野　ですから……。なんでも言って欲しかった。
立花　はい。
大野　なんにも言ってくれなかったから、それが不満だったんです。

一拍。

平井　（海野に）まあ、なんかしらゆってくれたらなあ。
海野　うん。
平井　受け止めてあげられるかもしれへんもんな。
大野　そうかもしれません……。はい。そうかもしれません。
立花　では仮に、大野さんが完璧なお母さんだったとしましょう。
大野　はい。「完璧なお母さん」？
立花　娘の言うことにはちゃんと耳を傾けるし、家事もしっかりこなす。勉強でわからないことがあれば教えてあげるし、放っておいて欲しい時にはそっと距離を取る。社会的な活動にも従事していて、夫婦円満。ユーモアがあって友人がたくさんいて、しかも美人だ。
大野　そしてちゃんと「血が繋がっている」。って、もう、まったくの正反対ですね！
立花　いいえ。そんなことはありません。そんなことはありませんが、まあ、今は実際の話はいいんです。あくまで仮定の話ですから。
大野　ああ、はい。仮定の。
立花　そう、仮に完璧なお母さんがいたとして、それでも、娘さんが何も言いたいことを言ってくれない可能性はあります。自分の殻に閉じこもって何も言ってくれない。その親子を見て、大野さんはどう思います？

一拍。

大野　もったいない。
立花　娘さんがですか？
大野　いや、二人の関係が……？　だって、ちゃんと言えば聞いてくれるお母さんなんですよね？
立花　ええ、もちろん。完璧なお母さんですから。

大野　だったら、何でも言ってみればいいのに、と思うんじゃないですかね。
立花　勇気を持って？
大野　そうです。勇気を持って。
立花　なぜ、それをするんです？
大野　なぜってだから……。そうして欲しいからですよ。きっとお母さんは。
立花　なぜ、そうして欲しいんですか、お母さんは？
大野　そうしなければだって、お母さんは、寂しいし、……というかもっと、……そうしなければ生きていけないんじゃないですか？　人は。
桜井　いや、そんなことはないでしょう。それは極端ですよ。
児玉　（桜井に）いいからいいから。
立花　そうしなければ人は生きていけない……。なぜ、生きていけないんです？
大野　だって、……何も言わなければ何も理解されません。言わなければやっぱり、伝わらないと思うんです。
立花　でも、大野さんにだって言えないことはある。
大野　あります。それはもちろん。
立花　それでも勇気を持てと？
大野　だってお母さんだから。相手は、お母さんなんですよね？　いや、私はぜんぜんダメなお母さんでしたけど、お母さんになるつもりはあったんです。なれたらいいなって。やれたらいいなって思ってたんです。
立花　それは本当ですか？
大野　★本当です！　本当に思ってました。本当に！
立花　……すばらしいじゃないですか。
大野　でも、何もうまくいかなかったんです、何も……。
立花　そんなことはありません。何もできなかったなんてことはない。オール・オア・ナッシングの考えにまたなっていますよ。
大野　ああ、そうか……。
立花　では、今度は思っていることを何も言わない人がいるとしましょう。

と、立花は大野が座っていた椅子を示し、

立花　乗って。
大野　え？
立花　さあ、乗って！

大野、立花に促されるまま、椅子の上に立つ。

立花　……愛すべき人たちに囲まれて、信用に足る友人がたくさんいる。でも、何も言わない人がいるとしましょう。少しでも人間関係に摩擦が起きるようなことは何も言わない、そういう人間がいるとしましょう。

大野　はい。いるとします。

立花　どう思いますか、その人のことを？

間。

大野　寂しいですね。それは。

立花　寂しいだけですか？　だってその人の周りには愛すべき人たちがたくさんいるんですよ？　どうなんですか、その人は？

間。

大野　弱いです。

立花　弱いですね。他には？

大野　ずるいです。

立花　そう。ずるいですね。他には？

大野　卑怯。いや、卑怯は言い過ぎかもしれませんけど……。

立花　いや、いいんです、卑怯ですね。わかったじゃないですか。

大野　わかった？

立花　それがあなたが抱いていたゆみさんに対する不満です。

大野　それは、……でも、……少し、あたっていると思いますけど……。実際、私は何でも言いたいことは言えるっていうか、そういう風にして生きてきてしまった部分があったから……。

立花　ええ、ええ。

大野　だからあの、黙っている人間がきっと、……卑怯とかそういう以前に多分、怖いんです。

立花　怖い？

大野　はい。そういう、本心では何を考えているかわからない人間全体に対しての恐れ、というか、怖い感情があるんだと思います。（明るく）私は、これでまあ、結構人間に対しては悲観的なもんですから、なんていうか、そう簡単に人はわかりあえるものじゃないぞ、って、そう思っているんです。親だって、子どもを捨てます。血が繋がっている親だって、子どもを捨てる時があるんです。

ここから、徐々に会議に参加している人々が退場していく。はじめに海野。

退場する海野に対して他の参加者は反応を示さない。

立花　そうですね。実際にそういうことはあるでしょう。

大野　はい。だから他人なんてもっともっと、絶対信用できません。だからこそ、言葉が重要になる。必死に、言葉を尽くす必要がある。そう信じているんです。独りよがりですけど、多分、私はそう信じていて、

立花　ええ、ええ。

大野　そりゃあ、うまくいかない時もあります。いくら言葉を尽くしてみたって、自分が本心を言えるとは限らないし、相手が本心だと信じているものが、単なるその場を取り繕うための嘘にすぎないのかもしれません。……相互理解なんてない。人間は、理解し合えるはずがない。そう信じているんです。だって人間は嘘をつきますから。私だっていつもいつもたくさん嘘をついて生きています。それに、言いたいことを言わない部分だって、ものすごく沢山あるんです。だから、他人に対してもきっと、そういう自由を認めるべきだろうって思うんですけど……。

一拍。

大野　（調子を変えて）きっと、心から嘘をつきたい人なんていないと思うんです。だから嘘にはきっと、その人の避けようもない苦しみが横たわっていて、沈黙にもきっと、その人の解決しようのない問題が横たわっていて……。だから、誰だって好き好んで黙っているわけじゃない。私だって、好きで嘘をついているわけじゃない。いや、もちろん苦しみからだけじゃなく、単に悪い心で嘘をつく人だってたくさんいるんでしょうけど、詐欺の人とかいますけど……。でも、それはそれで、そこに詐欺をせざるを得ない、その人の人間の限界が現れていると思うんです。その人が、そのような形でしか存在できないという哀しみが、きっとそこに、あるんだろうと思うんです。

立花　なるほどとても寛容だ。嘘にも沈黙にも理由がある……。それじゃあ、なぜゆみさんには何でも言ってほしい、なんて無理なお願いをしたんです？

大野　それはだって、……必要じゃないですか？　いや、もちろん、何でもいうためには信頼が必要です。そりゃ誰も彼も信頼しろなんていいません。できませんし。でも、人間が、お互いに嘘をついてあざむきあう生き物だったとしても、お互いに、すこしばかりの信頼を築き上げるためにはやっぱり、どうしたって相手を信じる、ということが必要になるんじゃないですか？　沈黙や、嘘は、相手を信じるための材料にはなりません。道具にはなりません。だから、血を流すような思いをしてでも、時には、それをしたほうが多分、よい結果が生まれるだろう、って。私はそう思うんです。もちろん、そんなことはいつだってできるわけじゃないですけど……。

間。

大野　他人は信用できません。だって信じていた人に裏切られてしまったり、姉妹（きょうだい）とだって簡単に攻撃しあうような関係になってしまうんです……。だから、安心できる人なんていない。それに……私の言っている言葉はいつでも、とても伝わりにくいんです。注意しているつもりでもすぐに荒っぽい言葉で話をしてしまうし、私は、黙ってしまう人の気持がわからない。まったく。わからないんです。それでいつでも、ひどく暴力的な要求を今までの人生でたくさん、たくさん、してきました。だから私は、「どうせ私の言っていることなんて誰にも伝わらない」ということを、だんだん、強く思うようになっていったんです。……それで、だからそれが、だんだん自分の中で確固たる信念のように固まっていってしまって、どんどんエスカレートしていってしまって……。伝わらないんです！　何も。何一つ、私の言っていることは伝わらない。「その本を取ってください」とか、「そこをどいてください」みたいな単純な言葉ですら、「伝わらないんじゃないか？」と疑ってしまうような状態になっていったんです、私は。今もそうです。今も半分ぐらいは自分が何を言っているのかわかりません。

立花　ちゃんと聞いていますよ。ねえ。みんなだって。

児玉　聞いてる聞いてる。

立花　そして多分、大野さんが何を言っているのかもみんな、なんとなくでしょうが、わかっています。

大野　本当ですか？

立花　本当です。

この時点までに児玉を含め、立花を除いた勉強会参加者はすべて退場している。

一拍。

大野　そういう時はなんだか、ヘンな気持ちになるんです。……とても奇妙で、恐ろしい感覚です。言葉が、なんていうか、言葉全体が自分の体から剥がされていってしまうような感覚です。自分の中ではちゃんと、意味のある単語だと信じていたものが、そういった言葉たちすべてが、人にとっては意味の通らない雑音の塊に聞こえてるんじゃないかって、そう感じられるようになる。コアラや、象や、キリン、そういった動物たちが鳴いているような声と、同じようなものなんじゃないかって……。そうしたらもうダメです。自分の話したり、書いたりしている言葉全体が、まるで土砂崩れでも起こしていくようになって、ボロボロ、ボロボロ、こぼれ落ちていくんです。何を言っているのかもう、自分でもわからないし、他人が何を言っているのかも、ほとんどまったく、わからなくなってしまうんです。そう、聞き取れないんです、言葉が。一所懸命、聞こうとしているんですけど、もう、何も聞き取れない。私の前にはただ、がらくたのようになった言葉の塊が、山！　山になって立ちはだかっているだけなんです……。

間。

立花　……確かにそうなのかもしれません。大野さんの言っていることはすべて、まったく伝わらないのかもしれない。確実に言えるのは言葉がすべて、――伝えたいことがすべて伝わるなんてことはありえない、ということです。

大野　はい。その通りです。

立花　それが不安なんですね？

大野　不安です。

立花　では、……どうしましょう？

一拍。

大野　「どうしましょう」……？

立花　出すんですよ、答えを。

大野　わかりません、そんなこと……。

立花　いいえ、わかっているはずです、あなたには。

大野　わかりません！　そんなことは全然わかりません！

立花　いいえ、大野さん。ここはあなたが言わなければ意味がない。あなたが答えなければ意味がない！

間。

立花　想像してみてください、あなたと同じような恐れを抱き、誰とも、何も話をすることができなくなってしまった小象のことを……。

大野　小象？　リトル・エレファント？

立花　そうです。リトル・エレファント。……パオーン、パオーン。パオーン、パオー、いや、象はしゃべらないからダメだ。象のことは忘れてください、一旦。いいですね、象のことは忘れて、一切！

大野　象のことは忘れて……。

立花　そうです。象のことだけは考えてはいけません。

大野　ううう……ダメです、忘れようとしても像がこびりついて……。

立花　んんん、じゃあ、象なら象のままでいい！　ただし、しゃべる小象です。想像してみてください、――あなたと同じような恐れを抱き、誰とも、何も話をすることができなくなってしまった、トーキング・リトル・エレファントを……。

大野　トーキング・リトル・エレファント……。

立花　さあ、あなたはそいつに対して、なんて言葉をかけてあげたらいいんです？

間。

大野　象だね……。

立花　違います！　いや、違わないけど違います。さあ、なんて？　なんて言葉をかけてあげるんです？

間。

大野　大丈夫だよ、と……。

立花　ええ。

大野　言葉は、……言葉は、もしかしたらまったく、全部、ちっとも、完璧に、伝わらないかもしれない。でも、大丈夫だよ。もしかしたら、ほんの少しは伝わるかもしれないんだから……。

間。

大野　だからあなたは……。伝わるかもしれない、という、可能性に賭けてもいい。もちろん、賭けなくてもいいんだけれど、賭けたっていい。そういう、根拠のない賭けに、いつでも、挑戦し続ける権利が……、そう、権利がきっと、あなたにはある。

立花　その権利を誰が保証するんです？　誰がそんな権利を保証してくれます？

大野　私です。

立花　……即答じゃないですか（笑）

大野　はい。私が保証します。だって私は……お母さんだから。「伝わる」という側に賭けることでしか、私は、生きていく道が見いだせないんです。たぶん、あなたも……。

立花　そうでしょうとも。

大野　もし、……もしも、すべての言葉が伝わらないのだとすれば……。何も、誰に対しても、もう話す言葉はない。書ける言葉もない。それは、私にとってはひとつの、世界の終わりです。だから、そういったわけで私は、死ぬしかない。

立花　本当にそうですか？　本当に死ぬしかないんですか？

大野　いや、そう考えてしまったら多分、死ぬしかない……。だから、生きていくからには、あなたに対しても、そうしてまた、自分に対しても、私は、何でもいいたいことは言っていい、と。そう言わざるを得ないんです。

立花　すばらしいじゃないですか。まったくすばらしい。じゃあ、あえてここで思い出してみましょう。象は言葉がしゃべれません！

間。

立花　どうします？

間。

大野　それでも、大丈夫だと思います。

立花　どうして？　象は言葉を理解できないし、なんの言葉も喋れませんよ？　どうして大丈夫なんです？

大野　だって……象の傍にいるんでしょう、私は？

立花　まあ、そうですね。象の傍にいます。

大野　そしたら大丈夫です。たとえ象が砂漠で、……干からびてしまう寸前で、……弱って、そこに座っていても。……多分、象は、……私には見えない、――リトル・エレファントにしか見えない、どこか湖のほとりみたいな場所で休んでいて、……私には見えない、豊かな水のたたえられたそのプールで、元気に泳いでいるのかもしれません……。そしたら私は、象の乾いた肌に手を触れて、……彼女の、湖のことを想像します。彼女のプールを、想像してみます。代わりに私は、その代わりに私は、彼女に海を、教えてあげようと思います。

立花　海？

大野　その象に。なんとか。どうにかして。……波の音を。砂浜の感触を。ゴツゴツした岩壁の鋭さを。海の、大きさを。なんとか。どうにかして。

立花　伝わらなかったらどうします？　それが何も、少しも一切、伝わらなかったらどうします？

大野　さあ……。

間。

大野　いいんじゃないですかそれでも。……一緒にはいるんですから。大丈夫ですよ、きっと。

一拍。

立花　よろしい、今日はこのぐらいにしておきましょう。みなさん、勇気をもって話をしてくれた大野さんに拍手を！

◎【勉強会】　その４

一同、舞台上に戻ってきて、拍手をする。
気がつけば、ルリカ、あいか、袴田、水川、チサがいる。
このタイミングで天城も登場。天城は斧を持っている。

大野　ああ、ルーちゃんじゃない……。いつからいたの？

ルリカ　結構前から。

大野　ああ、そう。

あいか　（皆に）すみません、なんか。

平井　いえいえ……。

一拍。大野は酷く動揺している。

あいか　じゃあ、行こうよ。お姉ちゃん。

大野　行こう？　行こうって、どこに？

あいか　ホラ、あの山小屋にゆみちゃんも来てるから。

大野　どうして？　どうしてゆみがいるの？

あいか　え？　昨日言ったでしょ。今日には二人も到着するよ、って。

大野　というか、待って。えー、なに？　あなたたちは、どうしてここにいるの？　なにしにここに来たの？

あいか　なにしにってだから……。

ルリカ　迎えに来たからだよ。

あいか　ねえ。

大野　迎え？　なんの迎え？　なんなの？　どこに連れて行かれるの、私は？

ルリカ　いや、だから、ゆみちゃんの結婚式だよ。

大野　ああ、そうだった。そうだったね……。ゆみの結婚式。ゆみの結婚式か……。

ルリカ　うん。

間。

大野　帰ってください。

ルリカ　お姉ちゃん。

大野　★いやあ、本当に申し訳ないんですけど、帰っていただきたいんです。今すぐ！

立花　大野さん！

一拍。

大野　ごめんなさいね。さっき申し上げたことは全部ウソなんです。

立花　違う。

大野　一つ残らずウソばっかり。

立花　大野さん！

大野　あたしもホラ、治療の一貫ということで、一応ここに顔を出させていただいていますから、たまにはそれらしい顔をさせていただかないと、他の参加者のみなさんに申し訳がないと思ってね。だからそう、みなさんにもすみませんでしたなんですけど、本当に。ごめんなさいね。すべて嘘っぱちなんですよ、さっき私が申し上げたことは全部。

と、袴田が笑い出す。皆が彼に注目する。

袴田　ああ、すみません、なんか。ははは。

一拍。

袴田　宗教じゃないですか。やっぱり。

大野　あなたたちが帰ってくださらないならあたしが帰ります。それじゃみなさん、さようなら。

大野、退場。

大野が退場するのに合わせて、そこにいる人々も退場する。大野とそれ以外の人々は逆方向に退場する。舞台には、立花と天城が残される。

【5】

◎【診察室】　その4

立花、薬を飲む。虚脱したように、地べたに寝そべっている。

天城はそれを見下ろすように立っている。

天城　……まったく君も業が深いよ。対話だディスカッションだと散々煽っておいて、自分は薬物中毒みたいな有様なんだからな。

立花　知らないか？　「理想」の対義語は「現実」だよ。

一拍。

立花　勉強会には来ないでくれっていったじゃないか？

天城　鶴の恩返しじゃあるまいし……。見られて困るもんでもないだろう？

立花　どうして来た？

天城　大野さんを君に紹介したのは僕だよ？　たまには様子を見たっていいだろう。

立花　へえ？　大野さんにそんな関心をもってたとは知らなかった。

天城　いや、関心はないよ。僕が興味を抱いているのは君だ。

立花　じゃあ、僕が来ないでくれっていったんだから来ないでくれ！

天城　そうはいかないよ。僕だって君のことをいろいろと知っておきたいんだ。

立花　なんのために？

天城　もちろん、治療のために。

立花　治療のため？

天城　そう、僕は君の主治医だからね。

立花　はは。なにいってんだ、逆だろう？　僕が君の主治医だ。
天城　そうかな？
立花　★当たり前だ！
天城　確かに初めはそうだったかもしれない……。僕が会社を辞めて君のところへ通い出したころは。でも普通は……（ゆっくり確かめるように）薬をもらう方が患者で、あげる方が医者じゃないか？

間。

天城　君が自分の病気を放置するのはもちろん君の自由だよ。それをどうこうしようっていう腹はない。
立花　じゃあ、どうこうしなければいい。
天城　でも、放っておくわけにはいかないんだ。
立花　どうして？

一拍。

天城　君と同じだよ。それが興味を持つってことじゃないか。
立花　違う。少なくとも俺は治療をするつもりなんてない。主治医になろうなんてつもりはない。俺は全然、……医者になろうなんて思ったこともない。
天城　じゃあ、何になろうと思ったんだ？
立花　勉強会だよ、俺がやっているのは。しかもあれだ、それだって精神科医のみなさん方みたいに集まった人たちを薬漬けにして金儲けしようっていうんじゃない。俺はただ、俺の考えに賛同してくれる人たちとささやかな……／
天城　★そんなに悪い人たちじゃないよ、精神科医は。
立花　わかってるよ！　そんなことはわかってる。
天城　誰も君を薬漬けになんてしていないだろう？　君が自分で、そう望んだんだ。

間。

天城　盲が盲を率いているような真似をされたんじゃ、危なっかしくてみてられないよ。
立花　差別語はやめてくれないか。それに、盲人が盲人を率いて何が悪いんだ？　盲人にしかわからない盲人の苦しみだってあるだろう？
天城　ムキになるなよ。……たとえ話じゃないか。

場面転換。
暗転。

▼音響:SE　新幹線の発車音。複数の新幹線が走り抜け、やがてその音が遠くなっていく。

◎【娘と】　その2

数時間前。山小屋。
大野がスーツケースを開き、大急ぎで中に荷物を詰め込んでいる。
ゆみ、登場。

ゆみ　なにしてんの？
大野　ん、こんなところには居られなくなっちゃったからさ。荷造り。
ゆみ　ふーん。そう。
大野　おせっかいなやつらが迎えに来てさあ。もう、放っておいて欲しいよ、ホントに。だからまあ、ほとぼり冷めるまであたしどっかに隠れてるから。あと、よろしくね。
ゆみ　わかった。
大野　うん。

間。

ゆみ　なんか、大変だね、お母さん。
大野　ねえ。助かるよ、あんたがしっかりしてて。
ゆみ　え、それってさ、すぐ行っちゃうの？　今？
大野　そう。今すぐ山を降りて、適当に新幹線にでも乗ってさ。うん。できるだけ遠くに行ってやるんだあ。

大野、スーツケースを閉じ、それを立てる。沈黙しているゆみに気づいて、

大野　なに？　どうした？
ゆみ　結婚式があるんだ。もうすぐ。
大野　うん。
ゆみ　あたしの。

間。

ゆみ　来てくれないの、お母さん？　来てくれる？

間。

大野　ごめんね。

一拍。

ゆみ　そうなんだ。

大野　ねえ。ホント困っちゃうね、ダメなお母さんで。

ゆみ　ねえ。

一拍。

大野　あー、だからまた、離婚して、再婚する時があったら教えてよ。そん時もまた結婚式やって。そん時は絶対行くからさ。ね？

ゆみ　ちょっとそれ、花嫁に向かって言う言葉？

大野　ああ、ごめんごめん。なんかあたしはいつもそう、あんまりなんていうか、ねえ……。ちっとも気の利いたことが言えなくて。困っちゃうよ、ホント……。

ゆみ　いいよ別に。無理しないで。

間。

ゆみ　お母さんの体のが心配だよ、あたしは。

大野　なにいっちょ前のこといっちゃって（笑）

大野、拳でゆみの肩をこづくような仕草。

ゆみ、大野に同じことをやり返す。強い。大野は倒れる。

二人、笑う。

ゆみ　いい日だね、今日は。台風一過で天気もいいし。今日はいい日だ。

大野　あんまり青空を信用しちゃダメよ。

ゆみ　どうして？

大野　山の天気は変わりやすいの。

ゆみ　うん。わかった。信用しない。

一拍。

ゆみ　がんばってよね。お母さんも。

大野　ん？　がんばるって、何を？

ゆみ、走るジェスチャー。

大野　ああ……。おーよ。絶対逃げ切ってみせる。

ゆみ　うん。ああ、ホラ、急がないと来ちゃうんじゃない？　叔母さんたち？

大野　あああ。そうだね。急がないと。

大野、大量の荷物を抱え、退場しようとする。と、振り返って。

大野　ゆみ！

ゆみ　……？

大野　あのさ、ちょっと新幹線のあれ、なんていうの……。

一拍。

ゆみ　なに？

大野　お金貸してくんない？

幕

【主要参考文献】

いやな気分よさようなら　デビッド・D・バーンズ
「うつ」は病気か甘えか？　村松太郎
個人心理学講義　アルフレッド・アドラー
アドラー心理学入門　岸見一郎
嫌われる勇気　岸見一郎／古賀史健
「うつ」を治す　大野裕
軽症うつ病　笠原嘉
森田療法　岩井寛
反〈絆〉論　中島義道
人を愛することができない　中島義道